

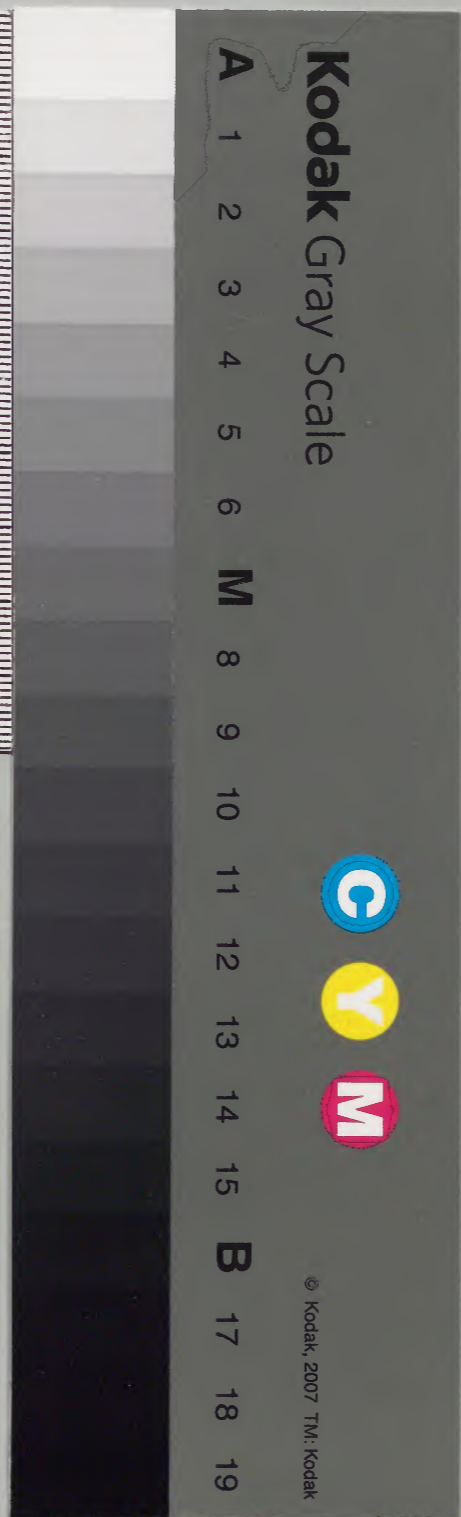
日本書紀傳

五卷中

和書
一〇五二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (15)	
函號	特	85 1

内一六六八三號



教部省
文庫印

清
圖書
文庫

直政
文庫

圖書
文庫

内一二六八三號

事實ハ何處迄ハ唯其二神ハ記續けて其五御
代十神ト申すハ實ハ一代二神あり御事を互不見合
せて曉テ可ク神語ハ語少傳入給へる者ありけり但
ハ古事記の次第を以て説を成せるハ御紀ハ此
世敷の中ハ其角攝尊活攝尊ヲ御名を漏さる故ハ
如此云時ハ正史を捨テ我意を立る如ク南田ハ此
然ル上件神世七代章の始ハ出たハ國扶捷尊を正
所ト國常立尊豊斟 淳二柱のこあり事古事記と同
し事ありけれハ此ハ五御代ハ有る且下るハ一
書ハ大戸之道尊大戸之邊尊を除いて角攝尊活攝尊
の御名を出さるるを思へハ御紀ハ撰者ト其事ハ
惑ハ有て得しハ定ハるハ故ハ如此ハ相違ハる
ハ古傳ハ誤ハるハ非
ガして撰者ハ失錯ハるハ
○次有神ハ次尔神坐理ト
訓べハ上ある第三一書ハ始有神人焉と云ふ訓様ハ

○日本書紀傳五

○四十六

等一々可一傳四四十小字の倍此の次字の美
所ハ上多正書小字時天地之中生一物云々便化爲
神號國常立尊次國狹捷尊次豐斟淳尊凡三神矣有
此小継ハ次字多事云々更多已ハ云々如く
右小一物云々物ハ第二二書小古國稚地稚之時
譬猶淳膏而漂蕩有淳膏云々塗土煮尊沙土煮
尊ハ御名小係也所以ハ八洲起元章第四一書小
伊弉諾伊弉冉二神相謂曰有物若淳膏略下所見ハ此
ハ此二神小至多其物小因成出させ御在坐
事申ハ更多ハ上小記傳三三十小記小國稚如

浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時有廣下伊那
那美神ハ成坐る迄小係小語多ハ國之常立神ハ
少次ハ皆此物小因成坐る事自然聞えたり有
明辨ハ有ハ此ハ思定む可く多其ハ猶第六一
淳膏生於空中因此化神號國常立尊と見えたり右
小云々如く此事ハ二神小係傳ハた多亦右小同
可ハ云々○塗土煮尊沙土煮尊ハ合せて一ハ説ハ其
本註小塗土此字毘尼沙土此云須毘尼と見えたり古
事記ハ字比地迹神次妹須比智迹神此二神と見えたり未遺
合三六七ハ御事ハ端在坐ハ已ハ小男女シカヒ給ハ
其始ハ如此多御夫婦ハ端中間ハ端在坐

乃引けり泥字釋秘訓一本泥を泥小作水又連
義小引三公望私記小向云此泥土沙土等之号有何意
乎答曰天地割判泥未乾尔時初生之神也故云泥土也
其後漸々堅固沙土既成是尔時土地之形容而所名也
小泥土沙土も並記せれか其時世小然多本小有し
ありけり儲御名義小右小証三分小如く全く土地の形
容小依て然號け奉多者小多く有ける記傳三卷小云
小清音小假字小多く用ひる水乃此訓注小依て
字比比を濁音小讀し非多り元連便小依て下の
言小頭を濁し常多ければ其言小濁音有れば其
頭小濁し例多り此比地の地濁音多り比
濁し例多り故此于昆居須昆居須推土統
と云北然言多り

土の義と多く通えなり以儲此物小已小云多如
く上第二一書小古国推地推之時譬猶淳膏而漂蕩と
有る其を又古事記小国推如淳脂と所見也是小
口訣小国推地推者国字比志地字比志也推却也所
見たるか如く其物の初生の所以て泥土と稱す
奉れる者多り即又同記小天神諸命以詔伊邪那岐命
伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之国に有
小土の未漂蕩して推し時の形状多く是多り師
小右小口訣の説小依て国推地推之時云文小依て
字比地推神の御名義を知り又其字比地推神と申す

八洲起元章第四二
書小伊邪諾伊邪冉
二神相習言有物多
常其中盖有国字
云と有し此の泥土
富の事本がうふ

御名小依て国稚地稚の訓を知ると云はれども實小
 然不言多し倍其右の国稚地稚の語の国常立尊の上
 小在ハ即此状頗難言と云はれ一物の成り始り
 云言多しけり故其字比志の意を考ふと上
 小云々ハ如く彼可美彦尊ハ其高皇産靈尊神
 皇産靈尊の産靈は資て天中ハ其一物を生成し給ハ
 不始ハ係りて可美とハ御名ハ負坐る事其言ハ令
 産あり但其ハ其生成させ御在し坐て御祖と坐す皇
 産靈神の方小係りて此ハ字比其生出る一物
 の御子の方小属て初生の義を以て言を成せる者ハ

公旅布より草小
 此事ハ心得ぬ
 地生を被連布て之時ハ
 之ハ之ハ當りて之知て

少けり然ハ上ハ志の言を添へ字比志と云時ハ其初
 生る物ハ状を言て成て神名ハ字比其物ハ云
 比國稚ハ字比志ハ其形状を語みと有はれ又ハ初合
 比て成りしと見ても違ふ可くざと可し正書ハ精
 吹之合摺易皇濁之凝場難と云々ハ天と成て
 精吹多し物ハ合摺易と云々凝場易と云義より地と
 成る可く皇濁り物ハ凝場難と云ハ合摺難と云ハ
 天中ハ見ハ多し一物の産生と云ハ其義一ハ
 故其産土此云子昆臣と云る其物ハ右引る
 紀記共ハ淳膏の如く多し物と云多し猶慥ハ證
 ハ上ハ第五一書ハ其中生一物ハ葦牙之生産中也
 有ハ外ハ猶淳膏と傳ハ此ハ直ハ産中と云

是なり此小千毘屋、推土の義、水と土と相混
 初より甚初、土の謂、起りて後世、
 物の許と成りて世の始、泥土の状、難言と
 云程の事ありければ、国土定りて、後、
 異あり物々其物の状、甚能類、
 あり然れ、後、泥を以て思ふ、外、
 全く其と同物あり、故、
 有あり、仁徳天皇十一年、御紀、
 詔群臣曰、今朕
 視、是國者、郊澤曠遠、而田圃火之、
 且河水横逝、以流、未不
 駭聊逢霖雨、海潮逆上、而卷里、
 乘船道路亦泥、允恭天皇

公多し和名、故に泥と和名
 也、和名此知古云此字見
 之、名義、故に、此、外、比
 地、之、訓、有、借、又、其、比
 知、利、古、又、古、比、知、古、比、
 之、書、古、美、之、訓、也、意、
 之、む、應、神、天、皇、三、年、御
 紀、小、瀧、田、古、美、院、之、訓、
 三、年、向、天、皇、元、年、難、波、
 水、津、島、根、野、之、有、之、
 泥、字、古、美、之、訓、
 是、多、し

四年御紀、小或、塗、納、釜、煮、沸、攘、手、探、湯、泥、
 有、之、泥、字、
 を、宇、比、地、と、訓、之、万、葉、三、
 五、十、小、展、轉、泥、土、打、雖、
 有、之、此、小、泥、土、を、比、豆、と、訓、
 之、十、三、
 九、下、小、展、轉、土、打、突、
 杯、母、と、有、之、此、小、土、を、比、豆、と、訓、
 之、名、義、故、に、泥、を、
 比、地、と、訓、之、を、考、合、す、る、小、比、地、
 の、浸、土、の、義、小、
 了、水、土、相、滑、り、た、を、云、稱、
 少、し、土、の、摠、名、小、非、云、
 あり、
 記、傳、三、卷、小、比、地、を、書、
 紀、小、土、と、作、水、た、れ、
 比、知、加、多、又、牆、壁、類、
 小、築、牆、和、名、都、以、加、
 岐、一、云、豆、以、比、
 知、之、有、之、比、地、を、證、
 小、一、云、水、浸、一、造、
 之、物、あり、
 土、形、又、築、牆、を、作、
 之、土、を、水、浸、一、造、
 之、物、あり、
 泥、の、比、知、小、屬、
 之、事、あり、名、義、
 故、に、泥、字、小、都、
 知、久、礼、
 之、云、訓、有、之、
 右、日、類、あり、
 然、之、を、丹、後、
 風、土、記、小、于、
 時、其、

此地事傳西卷三
 六下註云此形
 所以就了大辨
 父事... 須見...
 時鳥... 須見...
 置... 須見...
 一乾... 須見...

家豊而土形富故云土形里此自中向至于今時便云此
 沼里と云り心得事あり右の土形富を風土記の文
 法の図形と爲す時、國形富を依りて土形野と云ふ
 云成りたるを合さる事多し故思ふに土形里の比沼
 の本の地名あるを以て云ふ説共ふに土形と云ふ沼
 と云事あり唯泥水の沼ありけりを稍く富と云ふ
 成れり故に土形里と云ふ名に起りたりと云ひけり便
 至り今時便云此沼里と云ふ其泥多し由りて干沼と云
 沼あり其沼の水乾りて里と成りし由りて干沼と云
 義あり其津風土乾り丹後國比邊乃麻奈草と云ふ是
 小て今も此岩山と云ふ其地土相浸せりを以て
 國土の土を此地と云ふ中水と相浸せりを以て
 少万葉三卷三十五下小雨不零澱雲流夜之洳濕跡十
 一巻十五下小白細布乃袂漬左右二あど、濕をも
 漬をも此豆と訓之古今集春上小袖漬て結び水
 氷水をも春立つ今日風や解るむと有るなり此豆
 と泥をも此豆と云ふ其借其比地を右の如く浸土の義
 本一なるを思ふ可し
 と云時、此へ浸る言ふて水を云ふ成れり地と

云ふ一言其小當水は漢字の方小就て土と云ふ地
 も云ふ音と同一く成て己小音訓の差別無か如く小
 る小就て此類の言を求むる小田を多と云ひ畑を波
 多と云ひ又其方此方と云ふ多の言有り次小沼を比
 知と云ふ浸土の義あり地を都知と云ふ聯土の義も
 天津神國津神と申す津ハ助辞ハ非ず一處ハ謂
 る和名抄郡名紀伊國在田所刊を万葉七十九小足
 代行と有り又地をも土を小登許言と云ふ土凝ふて其
 一區を土地を云稱あり如此く多知都氏登の言共小
 土又地音字義理も相異る事無きハ偶然云ふ非ず

上世の古言彼の傳り有り存れ者といふ所思は地
 此然れ右の如く土地の多知都の登の言を以て稱
 之者、連あり續く義不出れ者あり正書不重濁者
 淹滯而為地、有か如く大小の大地を全を都知と
 云ひ小の撮土を都知と云ふ其亦淹滯の言不出
 之者あり此の記傳、地を續出の義ありと云れは
 強事、非あり

 土字、説文、地之吐出物也二
 象地之下地之中物出形也凡地
 之属皆从土、有吐出物之云、物出形と云、連續
 の義あり、地字、師、赤縣、太古傳、説文、地、元氣初
 分、輕、清、陽、爲、天、重、濁、陰、爲、地、万物所陳列也、从土也、聲、土
 云、ひ、也、字、同、書、不、也、陰、也、象、形、有、其、地、字、也、段
 玉、裁、注、小、坤、通、成、也、云、北、之、内、爲、天、地、之、根、故、其、字、从、也
 土、生、物、故、从、土、或、云、从、土、乙、力、其、可、笑、有、如、此、者、と、見、之

巴字の注、此篆、陰假借爲語、詞本無可疑者、而後人
 守疑之、許慎在當時、必有所受、之不容、以不見多怪之心
 測之、有、此、大、地、の、陰、の、象、形、あり、事、の、彼、章、牙、の
 如、く、前、騰、少、跡、の、四、を、環、海、を、成、れ、を、以、て
 知、る、事、あり、此、地、の、万物、所、陳、列、と、云、ふ、小、都
 知、不、連、續、の、義、有、と、等、しく、此、の、言、を、彼、の、音、と、合、て、大
 凡、同、義、也、又、右、の、溼、土、の、事、不、就、て、記、傳、不、後、世、歌、不、字
 伎、と、詠、不、物、是、あり、と、云、水、なり、然、る、泥、の、事、俗、不
 下、掃、呂、と、云、物、あり、水、に、泥、土、を、混、淆、し、浮、べ、る、を、云、ふ、れ
 其、形、状、を、語、て、不、字、伎、と、云、ふ、源、氏、玉、葛、卷、不
 字、伎、あり、根、を、留、め、む、と、云、ふ、泥、の、浮、滯、不、成、れ
 不、を、云、ふ、又、沼、を、と、云、ふ、字、伎、と、云、ふ、皆、同、く、溼
 土、の、浮、ぶ、義、有、り、沈、む、状、有、り、事、語、の、自然、の、勢

あり彼第五一書ウレチカ中にて云物を浮膏ウレチカと云浮膏と云
云ひ又ハ猶游魚之浮水中也ウレチカ多ク浮ウレチカと云ウレチカ合
世ウレチカ古事記朝倉官段多々天語歌ウレチカ美豆多麻宇岐尔
宇岐志ウレチカ阿夫良ウレチカ知那豆佐比ウレチカ美那許ウレチカ袁ウレチカ呂ウレチカ尔ウレチカ
所見ウレチカたウレチカ上ウレチカ浮膏ウレチカを云下ウレチカ落積ウレチカ事ウレチカを云
其ウレチカりウレチカ凝ウレチカと云ウレチカ字ウレチカ伎志ウレチカ阿夫良ウレチカ塗土ウレチカ當
此ウレチカ言ウレチカ多ウレチカ於ウレチカ知那豆佐比ウレチカ其浮膏ウレチカ動ウレチカた
物ウレチカ落泥ウレチカ留滯ウレチカ凝ウレチカと云ウレチカ即沙土ウレチカ事ウレチカ此
記傳ウレチカ一説ウレチカ小字ウレチカ浮ウレチカあり須ウレチカ沈ウレチカありウレチカ云ウレチカ此ウレチカ事ウレチカ
小少縁ウレチカありウレチカ深味ウレチカ有ウレチカ事ウレチカをウレチカ知ウレチカ心ウレチカけウレチカ然

塗土此云干昆屋ウレチカ浮土ウレチカ古国ウレチカ雅地
雅ウレチカ云義ウレチカ合ウレチカハウレチカ其ウレチカ初生ウレチカ然ウレチカ可ウレチカ於布
ハウレチカ草木ウレチカ限ウレチカ事ウレチカ非ウレチカ上ウレチカ云ウレチカ如ウレチカ植生
を波ウレチカ述布ウレチカ人ウレチカ長ウレチカ事ウレチカ生ウレチカ先ウレチカ是ウレチカあり
次ウレチカ沙土ウレチカ此云須昆屋ウレチカ有ウレチカ水ウレチカ上ウレチカ浮漂ウレチカ人ウレチカ雅土
の漸次ウレチカ小婦ウレチカ凝固ウレチカスウレチカ土ウレチカ義ウレチカ事ウレチカ右ウレチカ
註ウレチカ如ウレチカ然ウレチカ小其塗土ウレチカ一處ウレチカ凝固ウレチカ難ウレチカ
を已ウレチカ沙土ウレチカ成ウレチカ水ウレチカ窄ウレチカ事ウレチカ多ウレチカ就ウレチカ
窄土ウレチカ義有ウレチカ又粒ウレチカ言ウレチカ通ウレチカ又塗土ウレチカ浮ウレチカ義有ウレチカ
以ウレチカ沙土ウレチカ沈ウレチカ義有ウレチカを思合ウレチカ可ウレチカ上ウレチカ引ウレチカ
古事記ウレチカ於是天神諸命ウレチカ以詔ウレチカ伊邪那岐命ウレチカ伊邪那美命
二柱神修理ウレチカ固成ウレチカ是多ウレチカ用幣流ウレチカ之國賜ウレチカ天詔ウレチカ牙ウレチカ而言ウレチカ依

也又下章第四一書云伊弉諾伊弉册二神相謂曰有物
若浮膏其中蓋有國宇云々有即右之渥土不
當以即水之土未相分以之混成一時云云
少次云其正書云以天之瓊矛指下而揮之是獲滄溟
其矛鋒滴瀝之潮凝成一島名之曰礮馭廬嶋第一一書
云也於是二神立於天上浮橋投戈求地因畫滄海而引
舉之即戈鋒垂落之潮結而為島名曰礮馭廬嶋也
其外傳云然此不至於水之土之漸分以
乃所以其浮漂之入一物之締不凝結之義
を以て沙土と云ふ言意ハ沙土云々可事右云

註云如小釋秘訓正書云洲壤浮漂之語也與
秘記曰又向今文作洲字是則洲渚之字也言天地初分
多水土然則若須都知正讀如何答因土之在水上
也猶洲渚矣也有云此洲壤須都知訓也非也
洲之沙之言也同云云不就正和名枚を見云洲
水中可居者曰洲四方皆有水也和名須都知有思云
須昆尾ハ本砂礫より起り其大云々不至於洲
渚の砂とも成水云々けり然此小礮馭廬嶋
出来水云々謂云水中可居者曰洲云々其物始
て成出云々沙土煮膏也實云申奉云可事

事小亦必有以之
沙字說文小水散石也
有砂之相
通ク用字多記傳三卷沙
ハ水旁之地注セテ意を取
ル水ハ離レテ乾ル土を云
テ此
雅小鳥驚在沙云云是
洲也其意ハ右ハ本
同言多但此等ハ水を離
レテ乾ル土を云テ此
ハ沙土ハ猶潮中在
ル分ル水云云有テ是
水中和名抄ハ破水中
細碎也和名須奈古
有テ是水中
有テハ分ル水云云
又須奈古
ノ須ハ即須比智ノ須
ト同止云水云云
諸其塗土煮尊沙土煮
尊ノ下亦曰塗土根尊
沙土根
尊ト有テ煮を根ト
有テ音通ノ謂ハ非
テ谷其義
異多者有テ先其煮
ノ義を説ベテ其ハ
右ハ引ル
洲起元章小其牙鋒
滴瀝之潮凝成一島
ト見え第一
書小即戈鋒坐落之
潮結而為島ト有
テ更テ有テ古事記

小故二柱神立天浮橋而指下其沼
以畫者塩許
袁二呂二迹畫鳴而引上時自其
牙末坐落之塩累積成
島是淤能基呂島ト所見
ヲ多を記傳四十一
小此ノ状
を物ハ譬入テ云ハ膏
多を煮固む云始
ノ程ハ
水ト如ク多を七以テ攪
巡ル世ハ漸ク凝以テ行
カ如ク云水云云實小
奇ノ小故多ヲ説テ小
刀
を得テ考テ云云允
恭天皇四年御紀小謂
田ヲ盟神探
湯日一説小或深納釜
煮沸攘手探湯塗云
語有テ如
此ノ實小二神日此時
ヲ神所作也ハ彼漂蕩
ルハ先
物を煮沸一給云云
有テ先物を煮ルハ火

○日本書紀傳五
○五十六
少其火（バ）少金と石との相軋（アヒキ）る資小出來る物ふ
之事誰も知れざる如し故其天沼文の金を以て其塗
土沙土を攪探して給ふ（ハク）如何も膏を（カ）
煮るが如く煮沸して水氣ハ漸ホ去リ（アツシホ）鹵鹹此小因
て出來る事ふれハ右ヨ正書ハ是獲滄溟其予鋒福瀝
之潮と有る始ハ滄溟ハ唯水より福瀝之潮ハ然煮沸
すハ依て其水の潮と成れざるを見ざる所あり若て其潮
の凝て島と成れざる愈其煮沸る事ハ極れざる此
神名ハ二柱共小煮る言を以て祢奉（ニホ）水（ミ）所以是より
予此事を此小書ハ迄ハ向ハ其滄溟を採給ひし故
小御予鋒より瀾ハ福瀝水（ハク）と思ひし事ハ甚淺ハハ

○日本書紀傳五
○五十六
ある心少てこ有りけ然界を立て傳ふる水たる古傳
の妙處此小見え初て二神ハ御所作を今眼前小見奉
り知る心あり然ハ有也又此二神を（ハク）根と祢奉れ
る所以ハ根と云言ハ木も草も石も何ハ云
て和名抄ハ根株訓祢下久比世草木本也と有る根小
了物の基本（モト）を云あり彼古事記ハ国稚如淳脂而久羅
下那洲多陀用幣珮之時又ハ第二ハ書ハ古国稚地
稚之時譬猶淳膏而漂蕩と有て此物より別れて天
成（アツシ）可（カ）物ハ可美菩牙彦舅尊天常立尊残りて因
成（アツシ）可（カ）物ハ国常立尊常斟淳尊（ハク）已成出させ御在
坐て此二神ハ其より後ハ成出させ御在させ御在

其頸身こり有り此御靈ハ己小國推と云ゆる物
と共小成出させ給へる故小御名も然負せさ
世御在し坐て實小此国土と成てさ此一物の根本ネモト
神小御在し坐て其物を有たせ給へるを以て根と稱
奉小多あり故此より始りて此国土を所知有し有た
世御在し坐す天皇を大倭根子天皇と御世ここ小通
ゆて稱奉小多し根ハ右の義小因小多者多あり根ハ又
若こ云小同ト傳四五十見と可し儲此二神をしも伊
非諾尊伊弉冉尊の始の御名と見奉り定めて後小四
神出生章小於是共生日神號大日靈貴此子光華明彩

照徹於六合之内故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異
之兒不宜久留此國自高早送于天而授以天上之事と
有る疑此小於て解る事を得り然るハ高天原ハ二
神の御爲ふ御祖神の御在し坐す域あり又其天神
の詔命を戴り持し此小天降る世給ふ神あり此
國土の事こり萬小政じさせ給ふ可し御事ありけ
小然る小日神ハ何不生天下之主者歟と宣ひて生奉
る世給ふ御子あり如何小光華明彩小御在し坐
せばとて高天原を授奉る世給ふと云ふ事あり有て
皇祖天神の御許小奉る世給ひて其御事依しを仰

奉_レ給_ニ可_キ然_ル御事_ニ御在_リ坐_ズ其高天原
を_レ己尊_ノ御國_ノ如_ク御心_ノ任_ニ授_テ奉_レ給_ヒ
然_レ之_ニ瑞珠盟約章_ノ伊弉諾尊功既_ニ至_リ其德亦
大矣於是登天報命仍留_レ宅於日之女宮矣_ト有_レ其本
宮小還上_ル世給_ヘ之_ニ小_ノ殊更_ニ御事_ニ其_レ其
御心_ノ任_ニ坐_レ給_ヘ之_ニ狀_ニ其_レ如何_ノ其_レ其_レ
事_ニ其_レ實_ニ然_ル有_レ可_キ理_ニ其_レ其_レ其_レ右
の國雅如浮脂_ト云_ヒ又國雅地雅之時_ト有_レ不合_セて
第五_ノ書小其天_ト成_レ之_ニ物_ノ事_ニ其中生_レ物_ノ如_レ葦
牙之初生_ニ溟中也_ト有_レ此_ノ譬_ニ言_ニ有_レ此_ノ葦_ノ牙_ノ

己小溟中_ノ前騰_ル之_ニ傳_ル然_ル其天_ト
成_レ之_ニ物_ノ母_ハ此_ノ溟_ニ其_レ溟_ニ此_ノ神_ト俱_ニ成_レ
て此_ノ神_ノ其_レ溟_ニ俱_ニ生_レ坐_レ神_ノ其_レ就_テ考_ル小
然_ル天_ト成_レ之_ニ物_ノ本_ニ此_ノ溟_ニ在_ル上_ハ可_キ美葦_ノ牙_ノ參_ル
尊_ニ天_ト常_ニ立_レ尊_ニ立_レ給_ヘ之_ニ雖_レ此_ノ二_ノ神_ノ其_レ葦_ノ
牙_ト云_フ物_ノ御祖_ノ坐_レ故_ニ其_レ物_ノ因_テ成_レ之_ニ高_ニ天_ト
原_ハ此_ノ二_ノ神_ノ日_ノ神_ノ授_テ奉_レ給_ヒて天_上ノ君_三
を立_サ世_ニ給_ヘ之_ニ御事_ニ於_テ理_トも理_トも實_ニ正_ニ
小_ノ惟_ニ神_ノ而_レ然_ルも無_クて_レ叶_フま_ハク_レ御改_ノ
小_ノあ_レむ有_レ又_レ日_ノ之_ノ女_ノ宮_ハ謂_フて天_極あり_ト雖_レ
其_レ自_レ留_レ宅_ニ給_ヘ之_ニ

其理不於てハ易クマ下クム但神ヲ成坐テ次第ハ
紀記ノ如クムテ少クモ異無ク雖モ天地ヲ成始テ
事不就テハ右ノ如ク所以有テ事ナリ此事件今曉得テ見
ル時ハ其事其理相叶ヒテ少クモ限クム實ハ奇ノ事ナリ
心成レリ此ハ亦其理ト煮尊以下ノハ
神ハ一ト全ク伊弉諾尊伊弉冉尊ノ前
ノ御名ハ御在シ坐テ御事ヲ知テ大ニ証ス者ナ
ク世人ハ唯日神ハ御老ク履ケル御在シ坐テ故ク
高天原ヲ御父母ニ神ノ授奉ル給テ二神ノ於テ然
心得ル事ナレドモ其授奉ル給テ二神ノ於テ然
ル所由リ御在シ坐テ事依リ奉ル給テ可ク事
ハ此を以テテ日神ノ御身雅ク御時不成就ト云傳
説ハ愈誤ル事右ノ御名義ハ説訖ナリ古事記不
知ル者ナリ

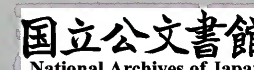
ハ此神名ヲ字比地迹上 神次妹須比智迹去神ト作

公見又注二振尊次
之振尊惟私記日向
查字振古事記有愛
差讀今此振字已無
事記而又吳讀可答
師說所見不詳獨可
讀字歟

了同ト御名ノ迹字ハ声ノ上下を注スルナリ 釋秘
訓ハ私記日向此二神御名者同字也何故有殘声之讀
哉答是據古事記上煮字讀上声下煮字讀去声其由雖
未詳如是神名皆以上古口傳所注置也若是被時祢號
如此不同也ト有リ記傳三 十 小此文を引テ斯ルハ
當昔ハ日本紀を讀ム此記ノ音を守リテ此計
の讀声をも漫ルハ爲ガレ事知ル近世ハ唯理説
を以テ主ト爲テ學者ハ斯ル事を以テ思入ル
云ルハ實不然言ハレ此ハ御紀を拜テ讀奉ル
輩ハ萬ハ直ク心得テ事ハ有レ其ハ又此

御紀の訓も然る事小て養老の私記より以降世々の
識者等の各其受る所有て訓定めたる者ありけ
ば今世の古學者の字小も文小も抱くが已ん心
の任小思ふ小讀ふ事ハ甚有まじき事ありけり其
中亦如何ぞ所思ふも無ふハ非小ども歌小も文
小も傳はるがずし此舊訓小遺小も古言の受たる貴
き物亦少くがば今此御紀を讀奉む小ハ必先其
舊訓を主としし假字の違ハ正す可く辭の漫りニシテ
ハ改む可く然し祝詞宣命の訓例小隨ひ訓めむ
ころ中々ある物損ふに無く其甚快をめる事ふしけり

是予が此傳を書注し仕奉るとし此御紀を讀奉る法
あり故凡て近世の人共其心小己く向ふ訓たるハ
取らず慶長ノ勅按を本とし此彼按合せ又釋
紀秘訓小取て其訓を定むる事あり但余あり誤訓
こそ思ひたる慥小証を得て此を改め凡て一字に雖
も漫小私意を加ふる所無き全く記傳小又此二神
右如く鈴屋大人の云論小此れを教小依り又此二神
を此下ある一書小男女耦生之神先有埜土煮尊沙土
煮尊略下有ハ古事記小次成神名字比地迹神次妹須比
智迹神と有ハ等しく妹妹二柱シ相並び出させ御
在し坐りてを申す事下十小安小く註せざる以て
知べし然るハ此より後五代十神の末小出給へる伊
弉諾伊弉冉尊小至りて始めて妹妹二柱嫁継給ひり



国々八十国島々八十島を生給ひけり此時小至り
 始め御妹妹御中向小御在坐か如くあれど
 其男女耦生坐ると云ハ本イ御妹妹相並ハ小御
 在坐事申イ更イ記傳三十小字比地迹
 神イ阿夜訶志古返神イ男女並坐を以て
 女神をハ妹と申せり嫁事未始さる時多れハ
 妻の詔ハ非ずと云ハ然相嫁ハ御在
 坐可き神ハ未嫁ハ給ハる小イ有ハ此
 御妹妹ハ何と云ハ申さる然ハ塗土煮尊沙
 土煮尊イ以下次々を伊弉諾尊伊弉册尊イ幼子程

仁賢天皇六年為地
 小古者不言兄弟長如
 女以男許兄男以女許
 姉と有之加日あり
 姉をハ妹と云ふ

の御名と心得奉りて違ふ事有申す
 又記傳イ其所小次妹ハ此イ五世イ神等
 ハ谷男女雙坐ハ稍後ハ生坐故小次
 有ハ妹人の義イ後イ事イ妹ハ古夫婦ハ在ハ
 兄弟ハ在ハ他人イ事イ在ハ男イ女イ並イ時イ其イ
 を指て云稱イ故イ記イ中イ例イ兄弟イを舉イ小兄イ妹
 云ハ妹ハ妹イハ妹イ某イ云ハ妹イ某イハ弟イ某イ
 云ハ弟イ某イ云ハ阿孫鉦高日子根神次妹高比賣命イ
 云ハ弟イ某イ云ハ賣其弟木花之佐久夜毘賣イ云ハ如
 心を着て然ハ女イ女イ向イハ伊毛イ云
 事ハ上古イハ無イハ然イハ稍後イハ女イ云
 向イハ云事イ成イハ万葉四卷吹黄刀自歌イ情
 由ハ思哉妹之又紀イ女即暴物贈イ歌イ為妹神左倍所
 沾而川流玉藻者又十九卷イ左書イ右為贈留女之イ即
 所詠家婦作也イ女郎者即大伴家持之妹イ有イ歌イ妹
 尔似草等見之欲里イ有イ是イ有イ借妹字イ書イ
 ハ此妹イ正イ富イ字イ無イ故イ姑イ兄弟イ向
 伊毛小就イ富イ者イ努力イ此字イ泥イ言イ

○日本書紀傳五

○六十一

本義を勿誤りしと云水なり今思ふ小説文小妹女弟也と云て此ハ女と有り小三子妹と有り然る小易小雷澤歸妹と云有ハ震ハ長男と父ハ少女と相歸ハ義ありあり然水ハ彼ハ事ハ事ハ古ハ妹と云ハありけり者○次有神大戸之道尊大戸之邊尊ハ勅本金澤本及諸本共小此ハ文を大戸之道尊一云大戸之邊大若邊尊曰大戸摩摩尊大戸摩摩尊ハ有り然ハ有水と古事記亦曰大若邊尊大若邊尊小次意富斗能地神次妹大斗乃辨神此二神名ハ有を以て此を訂正ハ辨ふと云一云大戸之邊ハ六字を大戸之道尊ハ下ハ收たハ四神出生章第六ハ書小級長戸邊命亦曰級長津彦命と有同日ハ誤ハ一此ハ下ハ男女の説相混水ハ其義を成さハる者あり故

鈴屋大人ハ警奉ハ舊ハ一云大戸之邊ハ六字大戸之道尊ハ下ハ在ハ誤あり一本ハ大若邊尊ハ下ハ在ハ宜ハ古事記と照ハ知ハ可ハ云水なるハ然ハ言ハ下舊事紀ハ紀記を取合セテ編成セテ物あり小其一本ハ如ク右ハ六字を大若邊尊ハ下ハ收ハ又畏庵隨筆ハ云ハ日本紀卷本ハ大戸道尊一云大若邊尊一云大若邊尊ハ有ハ板本ハ本行を小注ハ一ハ注を本行ハ一ハ錯誤セリト云ハ然ハ言ハ上ハ實ハ善本ハ之を以テ此ハ本文を然改メツガ己ハ私ハ非ハ古事記ハ相照ハ且此ハ大戸之道ハ對ハ大若

今又大苦尊ノ對小
心大苦道ト申テ御
名御在一其テ得
有レ

邊ノハ云ベクク理ヲ以テ己ノ誤ヲ無
書違ハなり一事灼然ハなりレ此ハ大戸
邊尊ト相並シ大苦道尊ト相對シてハ大戸
混ル事無ク是能通ス又此ハ大苦道尊ト申奉
御名ヲ撰得ル事ハ實ニ天神ト思賜ス大
天下ノ幸福ヲ一レ万世ノ慶事ト云ベクク者ハ
覆シ本同言シ大戸ノ謂フハ尋殿ノ御事
多ク其殿ノ屋ヲ覆フ事ヲ祝詞ニ天神ト舊日ノ御蔭ト
云ハ推古天皇二十年御紀ニ小宮殿ヲ立列ス事
隱ニ前句理ヲ摩須ノ所ニ能ク柳ノ蘊ノ訶ノ礙ト云ハ蔭ニ是ハ大戸
覆フ義有ル事ハ此一書共ニ虛中ニ又空中ニ作ル曾
羅ノ事ヲ天孫降臨ノ章第二ニ書ニ時居於虛天神武天

皇三十一年御紀ニ小糸天磐船ヲ而翔行ス大虛也崇神天皇
十年御紀ニ仍踐ス大虛登于御諸山欽明天皇二年御紀
小上達雲際下及泉中シクク有ル意富叙良ノ言ハ虛空ハ
大地ヲ覆ヒ周ル謂フ者ハ古事記ニ朝倉宮改ふ
天語歌ハ毛ハ陀流都紀賀延波本都延波阿米袁於
幣理那加都延波阿豆麻袁於幣理志豆延波比那袁於
幣理ト有ル於幣理ハ覆有小テ上ナリ覆フ云ハ小
万葉二三十五十天雲年日之目毛不令見帝爾覆賜而
有ル覆ハ更ハ有ル物ヲ負ヒ云ハ上ハ覆フ義
有ル物ヲ追テ云ハ我ハ覆ハ也ト申ス也ト比白同言

の類ひて此の大の言ひ出自是あり内侍所御神樂次
 第あり警蹕ふ於て於て云々人の鳴高きを押へて
 警蹕しむる云言ありあり於小覆ひ壓す義有る是
 あり又万葉二四十一小天教凡津子之ソラカフカホフノモガ有る天教發
 語あり小冠辞考ふ此の物を詳々ふ為すして大凡の意小
 空算するを空計と云を以て大津の大を大凡の意小取成
 して冠ふるせむるありと有る其も然る言ふは有る
 ども大の覆ひ義あり小就て思ふも天象の日月星辰
 共ヨミ小算て計へし為つ可きを大虚の唯覆へるの事
 て捉ふ可き處無くとも大オホ云より外無しと云事と

老子云

夫む所思しうりける此虚を唯大と云事あり有る就て
 事有り書洪範小建皇極と有る前漢五行志小皇極
 也と注して易の大極と同トきを礼記月令正義小道
 生二一則與易之大極礼之大二其義不殊皆為氣形之
 始也と有る大極大一物たり其大一上十下小
 註るが如く天字の一畫を下して大一て成りるバ虚
 空を小合兼て惣天の稱あり故淮南子精神訓
 小登大皇馮大二玩天地於掌握之中と有る注小大
 皇天也大一天之形神也と云る其天を大皇と云る
 あり老子小天地大人亦大と云る大も大皇のたと
 等しくして天之形神も大の一なり出たる義小
 て其大の我が天隆を元て大虚と
 云て大より外小物無るオホ似たり故大戸之の之の辞
 して能て續るる非ずと雖も大戸の覆所オホヒドの言ひ
 大殿の義あり諸此の八洲起元章第一二書小二神
 降居彼島化作八尋之殿又化爲天柱中然後同宮共住

○日本書紀傳五

○六十四

而生現に見えたる八尋之殿是なり但此戸之を續
けり殿の言ふ人充べくく戸をてて殿の義あり事
云々更なり又古事記より於其島天降生而見立天之
御柱見立八尋殿略行迴逢是天之御柱而爲美斗能麻
具波比略雖然久美度近興而生子略と有り上八尋
殿と有る其を兼て下久美度と云ふ殿即其久美
度より由なり其久美度記傳小謂ゆゑ隱所の義小
一弘仁私記序小古語謂居住爲止と云々止即此の
戸小當りて右八尋殿是なり其久美度を此小宝
劍出現章小於奇御戸起而作戸を所の義小用

水たふむ此の戸と相等トウウ以て此小て此
の戸ハ謂ゆる大殿の事ありを思定む可事
ウウ故此を以て予ハ此御名を説奉りて溼土オウ
汝土と固まりて礮馭靈嶋成出たる其地ハ天之御
柱を化堅給ひ八尋殿を化作せ御在し坐初させ給
入り當時の御名ト云ふなり但右の古事記小美斗能
記傳三卷小美斗ハ御所なり夫婦隱り寝之所を分て
所云けむ下ハ大穴年邊神の八上比賣小婚給ふ事
を美斗所多波志都と有る美斗と同一云水比水と
小美斗能麻具波比ハ正書小違合と有る第一一書
小爲夫婦と有る第六一書小合爲夫婦と有る然
訓て所の義更小無右の共爲又合爲を合せ思ふ
小美斗の與身あり能ハ辞あり麻具波比ハ味唯合小
謂ゆゑ遂將合交と有る如御合坐を云あり又

公爲夫婦と有る
始し又

美乃阿多波須ニ共身與乃雄略天皇元年御紀ノ與字を阿多波須と訓る是あり互ニ身と身と當り合ニ美多能ハ美斗日斗乃所ニ義ニ道ニ邊ニ謂あり次ハ彦ハ彦ハを對ハ世ハを以知ハ然ハ此ハ大戸之道尊大戸之邊尊ニ申奉リ大殿之彦神ヲ大殿之姫神ヲ申ス事ハ世始ハ唯男女ノ二神成出ス世御在ハ坐ハ謂ハ依ハ御名ハ有ハ借知ハ物ハ高く伸出ス祢ハ有ハ辨ハ物ハ退ハ祢ハ知ハ辨ハ男根ハ陰ハ謂ハありけハ男ハ知ハ之ハ記傳ハ引ハ字麻志阿斯訶備比古邊神ハ比古尼ハ此第三ハ一書ハ彦ハ此云比古尼ハ有ハ

天孫降臨章第五ハ書ハ老翁此云鳥賦ハ見え古事記明宮飯國栖人ハ歌ハ麻呂賀知ハ歌ハ万葉十四ハ等能乃奈加知師ハ有ハ選ハ知ハ言ハ續ハ依ハ清濁ハ異ハ有ハ此ハ同言ハ有ハ此等ハ記傳ハ水ハ如ハ男ハ尊ハ云ハ祢ハ事ハ右ハ彦ハ又老翁ハ字ハ依ハ事ハ有ハ水ハ此ハ道ハ次ハ彦ハ祢ハ申ハ見ハ尊ハ祢ハ此ハ非ハ然ハ傳ハ四ハ上ハ八ハ說ハ如ハ比古尼ハ引ハ義ハ有ハ知ハ出ハ略ハ又都ハ通ハ角ハ義ハ成ハ事ハ傳ハ三ハ十ハ四ハ二十ハ三ハ十ハ註

山和記凡男初生之時先見此處男之故謂之元氣其有分如

子か如し此ふ合せて万葉十六十六小美麗物何所不
飽矣坂内等之角之布久礼尔四具此相尔計六也有之
角之布久礼ハ陰莖を云ふり委しく別る時ハ角ハ陰
莖あり布久礼ハ和名抄ハ陰囊俗云布久利と有之其
事ありども此ハ陰莖ハ怒張れたるハ取成したる者
なり此等ハ速無事より及ぶし神名義を説奉る
ハ甚可畏くハ有れども己ハ隱身隠身と生出させ神在
坐る上ハ男神ハ神を別り事ハ此雄元と云ハ雌元
と云物を以て定むる事今ハ古ハ相易る事ハ事ハ
不可け此ハ予ハ心ハ道道を男根ハ稱と説奉りて少くハ強

なりとハ得しと思えざりて有む然るハ父を知くと云
小然くハ傳ハ卷八十五下ハ云るハ如く父ハ血道ハ
おハ謂ゆる根系紆脈を以て稱する母ハ腹あり此ハ
夫ハ精液を孕て子を生る義あり然れハ知くと知
ハ尊稱するも又雄元ハ謂ふも非ざる然
て右ハ引る老翁を鳥臈と云ハ小父あり麻呂賀知
ハ予ハ父ハ此二ハ父と云ハ如く親し
宗子ハ云ふハ記傳ハ知ハ言をハ辨ハ賣ハ同トク
男を尊して云稱するハ有之是より
しハ如く謂ふり妹ハ毛又女ハ賣ふと是より次ハ
云ハ如く此神ハ姫と稱奉らるハ謂ハ雌元ハ謂ふ
ハ小合也考ふ可ハ四神出生章第六ハ書ハ風神ハ御
名を級長津彦命と有ハ對して級長戸邊命と有ハ如
く考ふ並ふ可ハ姫ありハ易ハ邊ハ言を以て稱奉

此を以て其然る所以を知てくまむ宝鏡南詔章第
一書石疑魂命を第三一書小己疑戸邊に有て
此の邊ト等しき如くあるれども其小己別意有
て此小例引難事傳二十五下小註此小別
て神武天皇御紀の名草戸畔戸畔此又丹敷戸畔崇神
天皇元年御紀の紀伊國荒河戸畔云拓鞆有る此三
共小男小戸畔と云ふ此の處都の義小其地小長た
る者を三つ又御紀の其下小八坂振天某邊古事記明宮
段の百師水伊呂辨と有る正しく女を云ふ小
此大戸之邊尊の邊小同ト事なり然れハ記傳三四下

小辨ハ男神の地小對てて女を尊む稱なり老々を云
ふ尊むより出たる可しと云れれども其始ハ然る
可くある非ぬ備邊ハ賣ふとありて其ハ傳三十二陰陽
不分の下小注る如く陽ハ破又彫エ言小同トく
て勢カキ伸る意より陰ハ退ト又盛モ言小同トくして或
ハ凹クボ又ハ容イハ義を兼たり然れハ古事記小男神の
我身者成ニ而成餘處ニと宣ニ處ニ對ニ女神の吾身者成
と不成合處一處在と申させ給へる然退り凹クボに
る處の出来させ御在し坐る謂ふと謂ふと雌元是ふ
ゆ次小男神の故以此吾身成餘處刺塞我身不成合處上

宣へるゝ其凹こたる處ところ凸つりたる物を刺入させ御
在り坐まるゝふり盛もり謂いはる此を以て女を賣うと云ハ
其雌元もとたる處ところ成合なりずして退ひるを以て云稱いふむ
有あり平田翁の五十音義訣の公家の装束の次第の去きる
し着きるを未良須のとて退ひ字のを用ひ樂家の音の輕
重上下を云ふ甲ア乙イの字を當あて加理米理の訓のと云
水みづたるか如ごとく俗よも地ちの凹こめるを未伊流のと云ふハ
退入の義のたるも右みぎ不同ちがふ又甚と云思おもひ事ことあらう陰莖
の龜頭をしし俗よも甲アと云水みづハ女陰をしし乙イ不當ちがひ
違ちがふ可べからずむむ所思の也なり
又女陰を賣と云ふ聚の
義を合さず忌部物部

あとの部の聚の義のある是なり俗よも小兒の莖を知年
寫のと云ふ知し上の謂いはる角の義のあり年富の身の體の
て成餘の謂いはる合のせて女陰の事を未古のと云ふ
辨わるて云ふ一ハ乙イ處のあり一ハ乙イ事を未古のと云ふ
受うる所有を知し然れハ説文の地の字を从し土也聲の
有を也ハ女陰也象形也云ふ小段注の从し土也生物故
从し土也云ふ从し土也力其可笑有知此者の有る全文上五
十二下小引るカ如し但其中の从し土也力也云ふ又一
説ふ一ハ乙イを此の義の合せ見れハ可笑者の云ふ難
く可べからず字の説文の部の象の春草木の冤曲の而出陰氣
猶猶其出也乙也乙有る段注の乙イ難出之貌物之
出土難也如車之輾地溢滯の有る乙イ難出之貌
云ふ即退の義の合せ諸大苦道尊大苦道尊と申奉
り又大戸摩尊大戸摩尊と申奉り又大富道尊
大富道尊と申奉る若し戸摩の富と同言しし御
殿の祿のあらう被謂ゆる八尋殿の御事の事申す

也更あり登ハ處あり事右小注云か如く摩之年ハ聚
 の義ハ殿舎ハ處を寄セ合セテ一ハ爲云か如く意
 小下稱美ふ言小出たり備此次章第二書ハ化取天柱化作八尋
 之殿之有る天柱即八尋殿ハ心柱あり事傳七三十一
 亦く云云か如く然るを神宮ハ書共ハ其事を元御
 柱又心御柱又齋柱又天御量柱と其亦名共を擧て其
 を宝基本記ハ富物實て云ハ富ハ御殿ハ事ハ物
 實てハ家造ハ其心柱を物實て爲云謂云又傳十九
 二百三引註云如くハ太玉神所降神て有て其天石室殿ハ令下置
 帆負彦狹知二神以天御量大小所雜番等代大峽小峽之材而造

端殿古語美豆能兼作御筵及牙角之有を以考ふるハ
 美阿良可
 太玉命ハ太戸摩命と申義を兼ハる可ハ其神武
 天皇殿小建都檀原經營帝完仍令天富命太玉命之孫 率手
 置帆負彦狹知二神之孫以齋鉏始採山林構立正殿と
 有ふとハ本ナリ 其正殿を造仕奉り云小因て天富命
 以申すあり此を以て富トムハ殿舎を云事を察る可
 一又顯宗天皇御紀ハ室壽御詞ハ取嘗草葉者此家長
 御富之餘也ハ有ハ富貴ハ餘有る事小寄セテ其身屋
 子ハ屋根を外ハ嘗餘ハ事を詠言爲ハ世給へるあり
 古今集ハ此殿ハ語ハ富ハ三枝ハ三端四端ハ殿

造りせりしと有る宮殿の三端四端小立列並たを称
して諸の富けりといふ云々小て凡て富て云事つし
物あはる豊饒多しゆの舎宅の瑞しく榮ゆを云
小起し言ふて祝詞多し下津石根の宮柱太敷之
自高天原の千木高知の皇御孫命の瑞能御舎仕奉
安国止平久知食年と有る神政の事の豊饒多し由
を始小先云て次其所知食天下の事を云ふ先の富の御舎
を以て富とし次より物の豊饒多し事を富といふ状
小異ありず有る然る小記傳小大若邊尊大戸
此記の別段多し大戸惑子神大戸惑子神と御名の傳
の乱ひつゝありて云水たふ小就師の古史徴し

其説を受て記の小大戸惑子神大戸惑子神を給し
るあり其の小大戸之通大戸之邊と申す御名と互小相
似たれはありしと云れ其の自著の古史あり唯大富
通尊大富邊尊と申す御名の書を以て其の書を削
る水たふ其の可憐し事ありけり纂疏小富與
戸摩五音相通と注さし給ふを思ふ可し若し其古
事記あら上を大戸と續け下を麻持比を續くは
て戸摩の言と別あり思混ふ可し非又神名武
小阿波國名方郡意富内麻比賣神社有り其も同名小
の有水と其の天石門別神を天戸向見命と申すを
以考ふると其の神多し其の唱も同し其の義相等し
右の如三神如何故其大若邊尊大若邊尊と申奉る
う混乱と云て故其大若邊尊大若邊尊と申奉る
通と邊と謂ふ雄元雌元小依て祢奉る事上件
の如し又此を大戸摩參尊大戸摩姫尊と申奉る考し
姫も亦右小同し若し其の姫の古と賣といふ伊弉諾尊

伊弉册尊の政と美と不同ト云由ハ下
ト引カ
其大神ト天伊佐奈彦神ト天伊佐奈姬神ト申
奉_レ御名御在_レ坐を以て知_レ水たり借其彦の意ハ
傳四_{九十}彦舅此云比古尼の下ト註_レカ如_レ比古尼
ト人彼葦牙の如_レト云_レ物ヲ延出_レト出_レ言
あるト_レ比古人引伸_レの義あり次ト云_レ比賣の義
ト相_レ見て覽_レ可_レ者あり借此成餘_レ葦牙の如
ク萌騰_レり_レ迹の凹_レて成合_レト_レ處_レト謂_レト
女島_ト傍_レ速吸名門是_レト由傳三_{七十}傳四_{十四}
ト己_レ又註_レカ如_レ是即天地ト雄元雌元の形象を具

ト謂_レ多_レ又八洲起元章ト迺_レ天之瓊_レ指_レ下而探
之是獲滄_レ項其_レ鋒瀆_レ之潮凝成一島名之曰磯_レ取_レ廣
島ト有_レ多_レ雄元の象_レ大地ト雌元を探_レト島
を得_レト世給_レト_レ男_レ也相嫁_レ子有_レト謂_レ是_レ多_レ又
此_レ多_レト_レ言相通_レト_レ富許_レト_レ鋒木_レト_レ比古_レト_レ穂_レ莖_レ
ト_レ其意同_レト_レト_レ雖_レト_レ記傳五_トト_レト_レ云_レ水_レト
ト_レ如_レ木_レト_レ莖_レト_レ草_レト_レ莖_レト_レ多_レト_レ其趣_レト_レト_レ
事能_レト_レ者_レト_レ此_レを以て彦姫_レト_レ雄元雌元の稱
ト_レト_レ纂_レ疏_レト_レ彦姫別_レ於男女也ト_レ説_レ世給_レト_レ言_レト_レ信
ト_レト_レを知_レト_レ可_レト_レト_レ有_レト_レ
今俗_トト_レ男_レ根_レを_レ用_レ能_レ古_レト_レ
云_レト_レ其_レト_レ轉_レト_レ多_レト_レ言_レト_レ

公字鏡集小續けて
原を麻良波是と
訓り

公但同抄小南ノ字
小南と南との二字有
此小南の俗字なり此
別小南良と訓り此
當りて上より南
俗字なり小南ノ字
あり南の俗字なり
午よて女カノ意あり
其南の俗字なり方叶
和名抄小南字異記
云々々々々々々々々
有て下小南字見南
字也俗字以字字爲
陰以南字爲陰良具
説未詳と云々々々々
字を右小南良と訓り

可一和名抄小玉莖男陰名也楊氏漢語抄云原破前
一名麻良と有を名義抄小原破前一云麻良と云
訓有りの其破前の古語拾遺小男莖形を哀破前賀多と
訓て莖を云れ破前の柱なる事云と更なり麻良ハ
日本靈異記小南字を然訓て新猿樂記小南大而如横
血系雁高而似戴蘭笠長八寸大四伏と有少右小南
又南字ハ名義抄を見たり小南字ハ俗字又南南南ハ三
字有り然し南字ハ久煩と都昆と云訓有て此
ハ女陰ヲ稱する事傳十九卷三百六十二下小神樂歌
の陰名を引て弄しく注せり如し然るを玉莖小右
等ノ字共を當れり南ハ此良久又富賀良如奈那理
又攷理此良久と有て此未の方を取れり思合す可
の雁高而似戴蘭笠と有戲言なり思合す可
さあり又太秦牛祭文ハ大南と南風と有南字
を麻良と訓り此と南見たり南鳥甲又南南
門と有て其義無く南を大見及有り此ハ志伎
美又登自伎美又戸能志伎美と見えて更ハ由無ハ上
小南ハ作字非水ハ若く南を俗小南ハ作字是ハ
不可ハ此小南具理と云訓有を證と爲し借其麻良
ハ餘りて彼成餘處ヲ謂ふ事云と更なり此彼思合

世て此ハ比古ノ男莖小因 借其莖ノ男根ヲ稱する小
水ヲ稱するを知てくある 借其莖ノ男根ヲ稱する小
合てて姫を女陰ヲ稱すると云ハ傳四十四小註るハ
如く彼莖牙ハ如くハ前騰りて大地ハ凹める處ハ
古事記小生女島亦名謂天一根と有て其地ハ謂由
る速吸名門なる事已小平田氏説小出て予又弄しく考定
めたる事ハ女島を生給へるハ此ナリ 後ノ事ハ
ごん天一根と云稱ハ已小其謂ハ小因水多者なり其
地方を豊國と云し其豊國王尊ハ大地を動かし給ふ
と云ハ此處ノ天気を地下小吸入て其旋動ハ神事
を成し成させ禱在し坐す所ハ謂是あり此處即大地

の陰處あり故小此所小生著させ給へる島名を如島
 と云ふ本縁此小在る事彼可美葦身彦賢尊小彦賢と
 称奉れども此處小出たる所以なる小思合せて曉る
 可くある有けり然れ小此賣の賣の乙なる事上小云
 らが如く比の合の義なる小比古の比と同言小
 其義異なり備々陰を比賣と云ふ慥なる証ハ古事
 記白檮原宮殿小故美和之大物生神見感而其美人爲
 大便之時化丹塗矢自其爲大便之溝流下突其美人之
 富登 尔其美人驚而立走伊須岐伎乃将来其矢置
 於床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多多良

伊須岐比賣命亦名謂比賣多良伊須岐余理比賣
 是者惡其富登云と見えは是なり此細書小富登と
 事後改名者也云事を惡て比賣と云場なる由なる富登の合處
 あり比賣の合乙あり共小同小物あり富登と
 云は適合の事を通ひ憚れり然則其事實を
 違ふ可し小非なり此比賣の常小女同稱改なり此
 を異しまざるを以て其稱改め給へり此の義
 あり可し又此より物小實際なる所を比賣と云ふ此
 小同小又物を深く押包す小頭田爲ふ事小漢字
 の秘小富りて比賣事なり云此小此小可く也女

陰情處と云ハ名避處して其名を顯カサカサを諱カサセ
由多り又隱處と云ハ右ハ秘事ヒシコト同ト多カ相照カサカサ
辨カサカサ可カサ者カサカサ有カサカサ又日本靈異記カサ小同字を
志那陀理カサカサ訓カサカサ一カサカサ四カサカサ義カサカサカサ一カサカサ密カサ密カサカサ
密谷カサカサ云カサカサカサ字鏡集カサカサ小同字をカサ又同字をカサ志那
久流カサカサ有カサカサ朱字避カサカサ心數カサカサカサ又替同字をカサ有カサカサ志那
久流カサカサ又登昆良カサカサ又布佐具カサカサ又比佐具カサカサ又同字をカサ志那
久流カサカサ又布佐賀流カサカサ有カサカサ又瞬同字をカサ有カサカサ志那久流又
布佐具カサカサ訓カサカサ此等カサカサ志那久流カサカサ言カサカサ有カサカサ吟カサカサ志那
流又和那和良布カサカサ又小與布カサカサ見カサカサ欲カサカサ吟カサカサ有カサカサ志那
那流カサカサ又加那志夫カサカサ又小與布カサカサ有カサカサ合カサカサ見カサカサ志那
久流カサカサ密カサ密カサカサカサ志那流カサカサ密カサ密カサカサカサ然カサカサカサ志那
志那陀理カサカサ云カサカサカサ密谷カサカサ義カサカサカサ一カサカサ其カサカサ比賣カサカサ云カサカサ
密事カサカサ意カサカサ事合カサカサ思カサカサ可カサカサ者カサカサ多カサカサ其カサカサ同字をカサ
陰内カサカサ内カサカサ多カサカサ其カサカサ團中カサカサ也カサカサ説文カサカサ也カサカサ陰也カサカサ象形
訓カサカサ又名義抄カサカサ小同字をカサ久煩カサカサ都昆カサカサ訓カサカサ

古事記ハ次於
阿夜神次阿夜王
新志古延神有
阿夜之上事習
習多信此不足
惶根

都昆ハ答合カサカサ義カサカサ可カサカサ又平田氏カサカサ五十音義訣カサカサ
奈家漢語抄カサカサ陰内カサカサ比奈登カサカサ有カサカサ靈生カサカサ内カサカサ義カサカサ一カサカサ
本カサカサ速吸カサカサ名門カサカサ名カサカサカサ後カサカサ人カサカサ陰内カサカサ一カサカサカサ
間カサカサカサカサカサ其カサカサ前後カサカサ知カサカサカサ古揚カサカサ漢語抄カサカサ云カサカサ古
小陰核カサカサ又玉門カサカサ事カサカサ並カサカサカサ吉古揚カサカサ漢語抄カサカサ云カサカサ古
和名カサカサ比奈佐岐カサカサ有カサカサ合カサカサカサ夫カサカサ云カサカサ義カサカサカサ可カサカサ又此
奈登カサカサ合カサカサ之カサカサ内カサカサカサ有カサカサカサ大カサカサ地カサカサ陰内カサカサ有カサカサ
速吸カサカサ名門カサカサ一カサカサ其カサカサ并カサカサ有カサカサ又人カサカサ陰處カサカサ本カサカサカサ
事カサカサ多カサカサ其カサカサ速吸カサカサ名門カサカサ事カサカサ赤縣カサカサ大古傳カサカサ三皇紀
小事カサカサ一カサカサ云カサカサカサ又大扶桑カサカサ固考カサカサ一カサカサ黃帝書カサカサ謂カサカサカサ谷
神不死カサカサ云カサカサ此カサカサ之カサカサ門カサカサ地カサカサ之カサカサ根カサカサ老子カサカサ謂カサカサカサ百谷カサカサ玉列子
小謂カサカサカサ大壑カサカサ無底カサカサ之カサカサ谷カサカサ是カサカサカサ云カサカサカサ云カサカサカサ思合
可カサカサ○面足カサカサ尊惶根カサカサ尊カサカサ申奉カサカサカサ神カサカサ面足カサカサ
其カサカサ甚カサカサ可カサカサ美カサカサ具カサカサ其カサカサ日カサカサ滿カサカサ在カサカサ坐カサカサカサ同カサカサ面足カサカサ足カサカサ
堅カサカサ凝成カサカサカサ合兼カサカサカサ滿カサカサ名カサカサ滿カサカサ在カサカサ坐カサカサ
此カサカサ神カサカサ滿カサカサ面足カサカサ一カサカサ坐カサカサカサ就カサカサ同カサカサ土カサカサ堅カサカサ固カサカサ

國の面は足ふに任小神の御稜成り高く貴く掛ま
坐事可畏く成り坐事御在り坐事謂ふは第四
書小天地初判始有俱生之神と有る如く其物と俱
小成坐其物小主宰と御在り坐事御事改考を明ら奉
不可事所ふむ有ける其神の御身の方を先説言
可事あり面足尊の記傳三十一書紀小面足尊と作
水字此字の意の御名あり万葉二一十小天地日月
與共滿將行神乃御面跡次來中乃水門從九三十一望
月之滿有面輪二と有る面の足と云ふ不足は處無
具なり整へるを云ふ又面を云ふ手足其餘九と滿

足事ハ合此の御名あり採と云水たる是小の面
足の義通えたり備然御面の満足ハ坐事ハ次章
第一一書小陽神向陰神曰汝身有何成耶對曰吾身具
成而有稱陰元者一處陽神曰吾身亦具成而有稱陽元
者一處と有る古事記ハ於是向其妹伊邪那美命曰
汝身者如何成答曰吾身者成成不成合處一處在尔伊
邪那岐命詔我身者成成而成餘處一處在と所見ハ此
の具成を彼ハ成成と有る此ハ字ハ思ハせ彼ハ
言以て其意を知りしむる所あり若し其成餘處又不
成合處と有る是ハ御體オホミハ此ハ彼ハ成此を

を先宣ひて後小其陽元陰元の處不及也給へる
 然此具成の言の面足の義飽すと見えたりと
 云へる状ふむ有けり己く私記小向曰何故謂之面
 足若有意字答曰人形未必具足而至於此神人形漸具
 顔面足成故謂之面足也而古書或作面並是依語相近
 後耳先師説曰面足者人面漸為足之義也形質已具可
 謂太極也（字多きし）と古人七中く其義を説いたる比有けり者
 を（右の具成を成成と讀む其運ぶを近く論さむ小
 大同類聚方第二章小比登乃美乃奈連流半自
 免改、安萬都美佐麻美豆保乃計乃不多通乎加波世保
 豆祿奈理知之保奈利士々奈利須知奈利保念奈利南
 訶味多奈但與通依大奈利訶波奈利波奈利久知那
 別萬那古奈但美味阿奈々利加美介奈利遊毘奈利都

鬻念奈流有て一身の足備（此次第を云ふ奈流と此
 の成成と同ト義ある者小此小其面足の意をも
 思ふ可く）足と人の形体を具して一人（トリ）ありを云祿
 少傳十五（三百）小註（八十）如く子養又養字を比多須と
 訓るハ古事記玉垣宮段小又命詔何為日足奉答曰取
 御母定大湯坐若湯坐宣日足奉故隨其後白以日足奉
 也（有る）是正字小初生の時（初）養ひて成人と成
 すと云ふの倭姫命世記（上）日足宣と有る御齡の
 長とせ給へる御事を宣給へるより万葉十三（三）下小
 何時可聞日足座而十五日之多田波思家武登吾思皇
 子命者と有る長（ヒト）ありせ給ふを日足座と云ひ多田波

思タリ合カ足ツキ定ツキの義ミチありニ二ニ十ト少シ望シ月ツキ乃ハ滿ミ波ハ之シ
計ナ武ム等ト見ミえレ口カをシ其ノ上ニ引ヒ九ニ十ト望シ月ツキ之シ
滿ミ有リ面オモ輪リン二ニ有リ滿ミ有リ同シ意ミ多ク及リ不レレ
其ノ義ミチをシ曉ス可ク多ク又ニ三ニ十ト天ツク皇ミコ聖ミヤコ躬ミヤコ不レ豫レ之シ時トキ太
后ミコト奉ム御ミコト歌ウタ天ツク原ハラ振ヒ放ナ見ミ者ノ大オホ王ミコ乃ハ御ミコト壽ス者ノ長ナガ久キウ天ツク足ツキ有リ
有リ天ツク智チ天ツク皇ミコ乃ハ大オホ御ミコト身ミヤコ乃ハ無ク御ミコト在シ日ヒ坐マ心ココロ事コトをシ
天ツク象シヤウ乃ハ寄ヨヒテ天ツク足ツキ有リ壽ス奉ム者ノ世セ給ル多ク十九ニ十ト
四ニ天ツク地チ乃ハ足ツキ之シ照ス而シテ吾ガ大オホ皇ミコ之シ伎ヒ座ザ乃ハ可ク母ハハ樂ラク伎ヒ小コ里リ
有リ天ツク皇ミコ乃ハ大オホ御ミコト乃ハ麗シ乃ハ勻ニ乃ハ御ミコト狀シヤウをシ申マ奉ム
乃ハ多ク又ニ神カミ名ナ式シキ神カミ社ヤシ官クワン西セ院エン坐マ御ミコト巫ヒメ祭マツル神カミ八ヤチ座ザ乃ハ中ナカ

公奉之可後物ふか
源氏藤原等
給ふ事有一人の長
多行し事と云ふ

小生産日神足産日神玉積産日神三柱坐坐一ハ
呼吸の神多り一ハ形休の神多り一ハ靈性の神多り
由傳二十二卷興台産靈神の傳小註世々を見し知心
多り又其百五十三下小人の義を釋て云るか如く
小等し其面相足一人二人と云一足二足の義
此等事を書し原は面足の義を明く可く
惶根尊を古事記小所夜上訶志古渥神と有
此小亦曰吾屋惶根尊亦曰吾忌檀城尊亦曰青檀城
根尊亦曰吾屋檀城尊と所見なり其上も吾忌と
青も通ひ歎息の辞多り右も吾忌も吾字諸本
共小無くし心一字を伊美と訓む事あり下

公招河比賣歌小阿良
本耶古裝此許志也
見元
公味凍文年之十高照
日之禱子又三并掛文志
之後鳴言久母候之異
伎又并

小續子て義を成さ二收ハ鈴屋大人説小類聚国史小
此字有ハ依テ補ふ可ト云レバ多クハ從ヒテ此の本
文を改めたり阿夜ハ例ハ古事記朝倉官段天語歌小
許斯母阿夜尔加志古志ハ有少万葉二六下小神隨
神等座者具字霜文年恐美三七下小掛卷母綾尔恐之
言卷毛齋忌志伎可物又八下掛卷母文尔恐之吾玉皇
子之命五十三下小可既麻久波阿夜尔可斯故斯六下
小味凍綾丹之敷又十三每見文母之又十九决卷毛
綾尔恐言卷毛湯二敷有跡十三七下掛纏毛文恐十
四下小伎美我美家思志安夜尔伎保思母又十二波之

奈流兒良師安夜尔可奈思母又二十安持世呂登可母
安夜尔可奈之伎又二十安良禰布伊毛之安夜尔可奈
之毛又二十安也尔安夜尔左宿左麻氏許曾又三十安
比見之現良之安夜尔可奈思母又三十安夜抱可等比
等麻都古呂子又安也波刀文比登豆麻古呂子十七四
二小曾己字之母安夜尔登母志美十八二下小許己字
之母安夜尔多數刀美又二十可氣麻久母安夜尔加之
古思又四下許己字之母安夜尔久須之孫十九九下
酒見附榮流今日之安夜尔貴左二十下可氣麻久
母安夜尔可之古志又三下阿夜尔加奈之美又四下多

麻久良波奈礼阿夜亦可奈之毛也或有阿夜小靈
月久危多七過き分多何前カモトホ意表多事を歎不群
小記傳三四十阿夜驚き歎声多り皇極天皇
帝紀小啗嗟を夜阿ト阿夜ト訓リ又阿夜ト云レ
歎ク可シ事ヲ阿夜ル云レ又阿ト阿那ト
通ス阿那可畏シ阿夜可畏シ全ク同ク有リ如
水傳六六十阿那ト所傳十九十百一阿波礼ト下ト云
多事共ニ考合シ可シ又此吾屋ヲ吾忌ト云レ小異
多義勿レ考合シ獨阿用セ活ク云レ多義勿レ考合シ
三十三十阿母加去シ里波阿用久奈米加毛也或有

妹が心ノ阿夜ト頑哉ト云事ト通河此ト就テ出雲風
土記小大原郡阿用郷古老傳云昔或人此處山田佃而
守之尔時目一鬼來而食佃人之男尔時男之父母竹原
中隱而居之時竹葉動アコケリ之尔時所食男アコケリ云動アコケリ二故云阿欲
神龜三年ト有リ阿用ト右ト同ク阿夜ト轉ス備
改字阿用ト此阿用ト動字ヲ當ル也ト其言ハ明カ古ノ人ト所シ爲ス阿夜
の阿ハ物ヲ指シ辞ヲ夜ハ古ノ動ト字ヲ當ル也ト其言ハ明カ古ノ人ト所シ爲ス阿夜
動ト奇ト出ル義ヲ知ル足ル云レ者
又吾屋吾忌ト青ト云レ其ト歎息ト
義有リ少シ今ニ試ス云レ上ト天ヲ仰テ
青雲能レ靄レ極テ云レ目ト土ト在リ倉ト海原潮ト八ト百ト重
木ト色ト青ト依リ又レ其ト物

不依て色を名に成りしを以て見たり其を以て歎辭と
成せしむるを以て知りしを以て歎傳ふ云々此所
夜はと名を以てし何故に夜何と云ふ皆本所同十
く歎言ふは少くも異あり抑歎言ふは中昔
よりいへば唯悲しと愁ふ事あり云々然る
非ず而宜伎の長息の約中たる言ふは何事か
水心不深く思ひ事有れは長き息を吐く是即即
宜伎あり然る事あり何事も歎言ふは爲る事
多し皆歎言ふは夜何故に夜何と云ふ其惶根
声不出水に歎言ふは云々見ゆ信ふ然る其惶根
尊の惶の字が如くも纂疏に惶者恐惶之意と注
せ給へは是なり此より男神を面足尊女神を惶根
尊と有るは其意に二柱神不直事は男神御
面足は女神を以て女神の威儀を備へり坐あり
お非ず二柱神共御面の足に坐るは就其威儀

の相共備りて御在坐は然御事あり有りと
御面足の坐るは先は在何故男神と稱奉り御面足
して後威儀御在坐は故に女神の御名に成り
奉り者あり記傳三十一古書に畏可
畏^{コホシ}惶^{コホシ}懼^{コホシ}と云字を書き怖と意あり情何夜何
志古志と云時の猶緩也及多きを何夜何志古と云
其可畏さふ觸て直歎不言ありは弥く切りの情此
御名の神の御面の満足の坐るを以て其を望めば可
畏と敬なり意以て負む奉りしとありは考合
す可し私記に惶根者人面已備心意賢之義也と見え

たに可畏と賢と同義の言ふに有れども此に可畏の
方主と有る所ふりあり有る備此根の神と御
在し坐せし何祚又の伊呂泥の類ありむし所思え
りども男神と然る對し奉れり祚も見えざりけむ
此に彼後土根尊以上根尊の根の例あり可なりむ事
上五下十小註るを見て知べきなり 又記傳云く何夜
新志古と引續けり一は讀むべき為なり二續けり讀
めば上声ふ成るなり折任せり何夜と新志古とを少
く離して讀むべきか如し然離して讀む時元日平声
るるを然り讀むべき一は合せり讀む其は後條の語
物の中ふ何夜如志の著く云事あり有る其何夜如志
の讀声の如し然讀めり何夜上声と成るなりと云れた
りし得 右件ハ此二神の御名を御形体の御事小説奉

りるなり備又面足尊と申奉る御名の國の面あり相
係之事ハ次章第二の書小陽神先唱曰姦哉可愛少女
歟陰神後和之曰姦哉可愛少男歟然後同宮共住而生
兒中由此謂之大八洲國矣と有る古事記ハ其生給
へり大八洲國の中ハ次生伊豫之二名島此島者身一
而有面四每面有各云ハ次生筑紫嶋此島亦身一而有
面五每面有各云と有る此ハ身と云り其島嶼の形
体を成せしを以云るなり面と云り其島嶼の身有り其上
ふ著る國の事を云り若く又成務天皇五年御紀ハ
隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里因以東西為日縱南

北爲日橫山陽日影面山陰日背面に有て山陽を
 影面と云ひ山陰を背面と云ふ面是より万葉一
 二下藤原宮御井歌も植字乃堤上尔在立之見之賜
 者日本乃青香具山者日經乃大神内尔春山跡之美佐
 備立有日緯能大神内尔跡立山跡山佐備伊奘耳爲之
 青菅者背友乃大神内尔宜名倍神佐備立有名知吉野
 山者影友乃大神内尔從雲居尔曾遠久有家留之所見也
 其背友影友ハ備字ありて背面影面ハ事あり二
 下背友乃國之真水立不破山越而之有て背友ハ亦右
 山同ト拾茂抄ハ山陽道を加宜止毛乃美知山陰道也

曾止毛乃美知と有て同ト事ありて國の面を云ふは
 天日小向ふ域を以て影面と云ひ其の後ハ成申也
 其前
 下背面と云て人家の後を内ハ對てて背面と云ふ背
 同ト今ハ京都表江戸表と云ハ京都の方江戸の方
 又中古の歌ハ内外の事を以て面と云ふ事有て家
 前を表と云ふ對てて之を右の背面と云ふ同ト
 ずと雖ハ表を面足ハ神名式ハ生島巫祭神二座並大
 月次
 新
 生島神足島神ト所見なる此を古語拾遺神武天皇
 段生島ハ細書ハ是大八洲之靈今生島巫所奉齋と見
 久たを祝詞式ハ生國足國登御名者白
 辭竟奉者
 皇神能敷坐島能八十島者谷蟻能狹変極鹽沫能留限

狭国者廣以峻国者平以島能八十島遠事與皇神等能
依左志奉志見えたり是谷蟻能狭度極々山嶽峻
嶮峻地地をを言ひ壇沫能留限留海濱海多多土砂土のの凝
高高地地をを言ひ然然其峻嶮峻地地を平坦平以以狭
地地を廣大大以以成成其國國の面面を足足々々神神在在半望半
御功御を以以生島足島神神以以生國足國神神以以稱奉奉
事事予予講義講不不己己不不言言也也如如此此を以以見見時時上
不不引引る万葉二一二十十云藻吉讚峻国者國柄加雖見不
飽神柄加幾許貴寸天地日月與共滿將行神乃御面跡次
來中乃水内從と有る歌の意を亦説明のむ方と云

有けり然々其始不先國柄加神柄加と云々神乃
御面跡と云事不係りて國々々面々足々神々々
々面々足々々奇々々自然然有る神業不依々然
有る其然々所以を自向ひ自答ふるなり天地日月
與共滿將行と云々右の詞不狭国者廣久峻国者平久
と有る如く國の成具ひ行を言ふなり神乃御面跡次來
ハ其國形の調へる其魂神の御面の次第不足々坐
事不云々天地日月と共不神と國との御面足ひ行
中向の程中其地名の乃水内の事不係た者多なりけり又九卷
之滿有面輪ニと有る初月なり望不至なり次々不形
の滿足ひ行くと云々を合せて思ふ可く又天足彦

國押人命と申し又日本足彦國押人天皇と申奉る事
ども國形の足ひ行く事を以て稱奉りて御名あるを
し思ふ可又惶根尊と申奉る御名の國に傳れる御事
ハ堅重疑根と申す義ありけり播磨風土記に國堅大
神之子尔保都比賣命と有る傳九五下小云多如く土
神埴山姫命の御父母と御互に坐す此伊弉諾伊弉册
二神を國堅大神と申奉りてあり又古事記あり大神
の此二神の事依り給へる大神言ふ修理固成是多能
用幣流之國と有り又大穴牟遲少那毘古那二神段に
作堅此國と作堅其國と所見たる此等ハ國土を堅
まらせ給へるを然云るを此惶根尊のハ猶地下に凝

固まらざる意あり同記あり須佐之男命は御父大神と申
させ給へる御言ふ欲罷此國扱之堅洲國と有るを以て
其堅重疑根の義を明くむ可し重疑ハ万葉七五下小
眼不並買師絹之高自許里鴨十二下思咲八更二思
許理来目八面と有る是あり又三下小磐金之凝敷
山字又八下極此凝伊勢能高嶺乃又七下小神左振磐
根已凝敷又二三下石金之凝木敷山字十三下三下小石根
之已凝敷道之と有る許基志彼許基志を以て右に
相通ふ言あり又古事記神身滌段に其根之堅洲國の
事を總國と有る即醜國と云事ありあり醜ハ下凝

の義あり其れ同意に歸る義あり者あり根の國の
事あり古事記に日向國謂豊次土比呂列と云は大倭
の事を亦名謂天御虛空豊秋津根別と見え女島亦
名謂天一根と見え出雲風土記に所以號嶋根者國引
坐八束水臣津野命之詔而負給名故云嶋根と有唯
島と云事あり根の言を添給へり中昔の歌に
大和島根と詠るは同右の如く國の根と云の國土
の萬物を載る基なるを以て根と云るを此の根と謂
ゆる根國底國と云所地心の方の地上より根と指す
國有を以て云るは鎮火奈詞あり伊弉册尊の御言に吾

名狹能命或上津國宇所知食倍吾或下津國宇所知止
申は石隱給氏與美津杖坂亦至坐氏所思食久吾名狹
命能所知食上津國亦云と有る上津國の地の外表
に在り男神の面足り給ふ城あり下津國の女神の
入給ひり治給ふ根國あり石隱給自有あり其入る世御
在り坐一道の巖窟ありを以て其堅直凝根なる義を
と辨ふ可し又古事記に故号其伊邪那美命謂黄泉津
大神と有唯は往て其國の主と御在り坐小八有心
るる大始より大地の根底の方を堅凝し給へり右
小云る如く御功の御在り坐小依り事と云む所思

えたり然れハ此始ハ溼土煮尊沙土煮尊と申奉る御
名御在_一坐中溼土ハ柔_ろろ_ろあ_ろろ_ろ沙土ハ剛_こ又存
と沈む日義を合_あり上下を分り男女を定め此亦
面足_て申_し地上を形容_{かたち}給ひ惶根_こと申_し地下
を凝固_めめ_せ御在_一坐_ろ神事_の運_びる_も妙_{なり}
言_ふ述_へ語_を究_めり_し申_さし
と奇_くと_も御在_一坐_ろ神事_の運_びる_も妙_{なり}
御祖神等悉く_も國を_し生_給ひ_畢て更_も神を_し生_給ひ_大
事を_し此_も竟_させ_御在_一坐_ろ別處_を建_たせ_給ひ_{男神}
ハ天上_も女神_も地下_も谷事_{コト}解_るせ_御在_一坐_ろ國土
を_し相保有_れと_御在_一坐_ろ事_の其始_{より}斯_くい_ふ所

以有_る事_{あり}其由_て來_る所_有る_者なりけり其ハ皆
謂_ゆ也
皇祖天神_の天地_を預_め鑄造_し給_ふ禹事_の御在_一坐_ろ
不_因り_事上_{三十一}丁_云ろ_を見_て考_合す_可し_猶
堅_直疑_根と_説ふ_就て_例ハ_傳二_十卷_十丁_石疑_地
命_の下_ふ云_ろカ_如く_彼神_名七_石直_疑ふ_其質_石を
居_て上_ふ其_鐵を_置て_疑一_國め_て彼_謂ふ_也
咫_鏡を_ハ造_奉せ_給へ_ろ重_疑の_義を_此と_全
く_同ト_義
○伊弉諾尊伊弉冉尊古事記_ハ伊弉那岐
神次妹伊弉那美神と有_り其成_坐る_所ハ_此く_神
と有_り次_ハ天神_諸の_命を_受賜_りつ_せ御在_一坐_ろ
天降_り坐_る所_ハ命_と有_り是_を其_尊其_命と_申す
ハ_其天神_の命_を戴_持し_其物_其事_ハ仕_奉る_せ給
ふ_所ハ_由り_事を_明す_可し_所ハ_傳三_十八

下小註るを見可し此大神等御名鎮火等詞小
 神伊佐奈伎伊佐奈美乃命と見え神名式小淡路伊
 佐奈伎神社と有し佐々清言と見ゆも猶外小伊
 射奈岐神社又小伊射奈美神社と出れり古事記の
 如く伊邪と濁少下讀奉る可きなり出雲風土記小
 伊弉奈相乃麻奈子坐と有し伊弉を古本小伊佐と作
 小又伊弉奈神命と出たり此を清言小唱奉る時
 小伊佐小不知義小成り其義違ふと雖も元小
 小推す時小伊佐小氣進小義小勇又小功小同
 小くし人カを誘引ふと云も此方小氣小進カ

の事ありけり其元小同言ありつゝむくし備此小
 小伊弉小假字なり諾小吳音の那久を轉し小那岐
 小用ひるなりカ諾小冊小意有ふカ非カ
 小又其冊字小畏庵隨筆小卷本小冊小作小由カ
 其小吳音那年カを轉し小那美小用ひるカ
 一カ混ぬ冊カ成ぬカ思カ猶甚
 思来無子心カ為ぬカ其一本を以て必然カ
 如何カ定め得る可き此冊字小那美小遠カ
 小然カ古来書来カ諸本冊小作カ上カ此字小
 新カ那美カ命カ御在カ坐カ用カ給カ

見奉りて何ぞ難き事か有む字の唯物不記す目標
ある物ふて有れれ敢て其字不泥む可き不非れが
予の古来用ひ来る任ありし冊字を此不用ひさせ給
て音を那美と心得て有むと思ふ同書不板本相
相を略し丹不作を誤て冊不作似せりけり今
此を取て云り相と冊と字形も似せりけり偏と
一不成て然誤りあり云ひけり此云ま
ト事なり記傳三卷丹冊の佐久音なり甚遠し又
再と作れども佐何音なり此甚遠し又冊を集韻
不音詔と有れども此遠し然れども右の字共々皆馬
誤り或説不南字の誤りあり思ひけり又冊字音南と
有れども此ありむと所思せり猶史記の管蔡世
家不周姬登り曰母兄亦十人の中不冉季載と云ふ有
を正義不冉作丹音双耳及或作那音同と有れり此冉
字あり可し史記の古より通收く見る書より殊に人

名ありし由有れが取用ひしれたるあり可し双耳及
今此の吳音那字ありを羊を美し轉し用ひたる事諸
の例不同じ是又例多き事なりと云れり然る説
ありて容易く古来書来る事を改む可き不非れが予
に何方より木の伊并諾尊伊并冊尊の伊并を口訣
任不在むと思ふ伊并諾尊伊并冊尊の伊并を口訣
不諺語と有り耶人耶此の略る事記傳の説り如し
然るハ八洲起元章不陰神先唱曰意哉遇可美少女焉
云て是行也陽神先唱曰意哉遇可美少女焉と有る唱
字を金澤本不伊邪那比此と云訓有り然れが第一一
書不陽神先唱曰姪哉可愛少女歟陰神後和之曰姪哉
可愛少女歟然而同宮共任而生児と見えたる母を唱和の
御詞と世に申すも伊邪那比の御詞と申す者あり古

事記小此事前後不在故尔及降更往迴其天之御
柱如先於是伊邪那岐命先言阿那迺夜志愛衰登賣衰
後妹伊邪那美命言阿那迺夜志愛衰登賣衰如此言竟
而御合生子と見えたる此ハ二柱御祖神の妹妹弟の御
契の御在一坐初一因を生給ひ神を生給ふ大礼の
御時多事傳六六十七四五十の事一註一か如一又
此ハ第十一書小陰神先唱曰姪哉可愛少男年便握
陽神之手遂為夫婦と有一殊小其相牽ふらせ給へる
意多む所見たりける若此ハ相共一誘ふと御在一坐
て妹妹二柱嫁冠給ひて因一八十回島八十島を生

給又又八百万神等を生給ひて大事已一畢一也給ひ
功既小至少徳小亦大御在一坐て皇祖天神の事
依一奉一せ給へる大御命の幸カキを事成一給へりけれ
ハ主張一の御名と定一せ御在一坐て自然一の勢
あり有一けれハ上一註一か如一其始塗土煮尊沙土煮
尊と申奉れり一次一の負一給へり御名
共ハ隱一此伊邪諾尊伊邪冊尊と申奉る方あり
御事跡も何一傳一ハれ一多一む有一へりける又記傳
小此ハ適合一せむと為給ふ時一交一り伊邪那と誘ふ
て給へる御言を以て即御名一負一奉り一伊邪那
汝一あり有一て一云れり一予一此初稿の時一甚く
感一けり却一り其本説一伊邪那比男君伊邪那比女君

い云れたるを然りて心も留まらざりて今思へば
悔み八千度甚者なり事多しけり然るも新居繁
甚か得させたる金澤本なる實小皇神等我心を向
り給ふてし授給はる御靈物多しけり今此過を書
して鈴屋大人は伊弉の例に瑞珠盟約章第一一書
謝奉る者なり
日神と素戔鳴尊と相共小御誓の御事御在し坐ける
井を去來之眞名井と有る去來其正書小請與共
誓て申させ給ひ素戔鳴尊の御自誓に給ふてし
日神も御誓の御事御在し坐へり由を促がし奉る
世給へる小因る事傳十六八三十小云るか如く又神武
天皇御紀小先遣使者徵况磯城云々更遣八咫鳥召之
時鳥到其營而鳴之曰天神子召汝怡装過怡装過過音

云二次到第磯城宅而鳴之曰天神子召汝怡装過伊弉
過と有る万葉十三三十一小宰相出將見と有ると同ト事
ふり去來其イサと誘ふ義多し神功皇后元年御紀小則
欲高已衆と有る歌小字摩比等破貴干摩貴磐貴岩貴奴知野伊徒
姑播茂伊徒奴姑共池伊弉阿波那和礼波又忍熊王逃無
所入則喚五十狹茅宿禰と有る歌小伊装阿藝伊佐智
須區祢云々と見え又應神天皇十三年御紀小時搗大
鷓鴣尊云々と有る大御歌小伊装阿藝と謡はせ給ひ
けるふい何れし人を誘ふ義多しけり又後仲天皇
御紀小去來穗別天皇と大御名を書し奉りて去來此

公御紀小時大神樂太
子名相易故号大神曰
去來沙列神と有る也
ふ小御名易の事小御
かこせ給へる故去來
即神と申す事と古
重記に謂ふ就易名之
帯と有る事と因りて
即名と云可く又

云伊特と有る上イナ去來イナと誘引イナふ義イナ小出たゆけと事
申すも更あり又南化天皇御紀小宰川此云伊社箇波
と有る地名イナが誘ふふ意イナ無イナめれとイナ宰字
を伊邪と訓むイナ其訓を借る者イナ少イナゆ少万葉三
二十イナ小玉藻イナ將イナ行見イナ四イナ八イナ下イナ小宰此向行毛不去毛イナ早
又四イナ十イナ枕與吾者宰二將宿八イナ五イナ十イナ小今夜之雪尔宰所
沽名十イナ九イナ下イナ小吾舟者宰榜出ふイナ有イナりイナ又去來の字を
一卷十六イナ下イナ小吾妹子イナ字去來見乃山字二十六イナ下イナ小去
來子等早日本邊三卷二十六イナ下イナ小去來児等イナ香椎乃イナ滴イナ尔十九卷三十
早六卷二十二イナ下イナ小去來児等香椎乃滴尔十九卷三十
一イナ下イナ小此雪之消遣時尔去來歸奈イナと有イナりイナ傳十六卷
去來之真名イナ井イナのイナ下イナ小引るをイナ見合イナ可イナしイナ和訓イナ祭イナ小
梵書イナ今北地人相召多イナ云イナ去來イナと見イナえイナなりイナとイナ云イナりイナ陶

洲明か歸去來辭イナ小去來を伊邪イナと訓イナ源氏物語イナ小
伊邪イナと有イナりイナ去來イナと有イナりイナ人イナを誘イナふイナ詞イナありイナ又伊
邪多麻向イナと云語イナのイナ有イナりイナ去來イナ來給イナと人イナを誘イナふイナ詞イナありイナ又伊
何イナれイナと有イナりイナ伊邪イナのイナ事イナを起イナすイナと人イナを誘イナふイナ詞イナありイナ又伊
第イナ十イナ三イナ部イナ小衆人イナ伊謝奈イナと宰イナ互イナ仕奉心
義イナ多イナ少イナ續紀第十三部イナ小衆人イナ伊謝奈イナと宰イナ互イナ仕奉心
波イナ禍息イナ互イナ善成危變イナ互イナ全年イナ等イナ念イナ互イナ仕奉向イナ第十九
詔イナ小逆黨イナ伊射奈イナ此イナ宰イナ而イナ略イナ詔イナ云イナ以此事伊佐西イナ止イナ伊
射奈イナ布イナ依イナ而イナ伊佐西イナ止イナ車イナ者イナ許イナ而イナ有イナ之イナ此伊佐西イナ本
小俱佐西イナとイナ誘イナふイナ鈴屋大入イナ解イナ小伊佐西イナ止イナとイナ云イナりイナ
可イナしイナ万葉十四イナ二十イナ下イナ小安左字良字遠家尔布須左尔字
不イナ續イナ麻イナ受イナ塗イナ毛イナ安須イナ伎イナ西イナ佐イナ未イナ巴イナ伊射西イナ手イナ騰イナ許イナ尔イナと有イナ之イナ結

句ハ小床小早ク入テ寐心ト誘ふ事アリ中音ハ詞ハ
 凡人を誘ふ事小伊邪佐西給ハト云々事有リ是事
 云云水ハ多實不然言アリ又第三十一詔小竊仁心
 年通天入伊佐奈比須二年己莫第三十二詔小諸能
 勞家入等字教伊佐奈比進帝與利益須益須勤結理奉
 侍止之天第三十三詔小人仁伊佐奈須方礼人毛止毛奈
 方須於乃毛於乃毛負仁能久淨伎心字以天奉仕止詔
 第四十五詔小人伊射奈比惡久穢心字以天遊在
 謀起臣等方己戒比伎婢全是託彼依都等所
 見ナリ又万葉三八下小物乃負能八十伴男字召集聚

率比賜比九三下小就鷲任筑波乃山之裳羽服津乃其津
 乃上尔率而未通女壯士之往集加賀布耀歌尔十七下
 五小麻須良字能登母伊射奈比底十八下小毛呂比
 登字伊謝奈比多麻比善事字波自未多麻比豆と所見
 何水也同下事アリ若テ其十五下小率尔今毛欲
 見秋芽之四様ニ将有妹之光儀字と有率尔を伊
 邪那美尔と訓イナメ率並年ノ意アリ堀河百首小伊
 邪那美尔今心亦見イナメ云々詠イナメ同トクト那比
 を那美と云々小此亦那比ノ意ハ知ル可ク
 云々云々イナメ云々此例ハ高那布ハ高並
 云々明那布ハ友並云々皆此ト同トクト此ト美

と通ハ一云あり新撰字鏡ハ寧又信をも伊佐奈布
と訓テ勸於人也と注セリ又唱和ハ唱字金澤本ハ伊
邪那比氏と訓ルハ名義抄ハ唱字ハ伊邪波流とハ伊
伊邪那布とも云訓見エ引唱を伊邪那布と訓之又常
ハ誘引をハ唱引をハ伊邪那布と訓之又佐曾布と訓
ハ佐曾布ハ進副ハ義ハ其義相等ハ有ルハ考合
テ可キ故伊弉諾尊伊弉册尊と申奉ル岐と美とハ上
六十ハ謂ハ大戸之道尊大戸之邊尊と申奉ル道と
五下ハ謂ハ大戸之道尊大戸之邊尊と申奉ル道と
邊と又大戸摩彦尊大戸摩姫尊と稱奉ル彦と姫と同
ト事ハ彼成餘ハ物と成合ズ物ハ稱を以テ
御名ハ下ハ添奉ルハ男神女神を別テ奉ルルあり下
あり沫蕩尊ハ岐ハ此ハ同ト事あり倚然岐と美と
を以テ稱奉ル別テ事ハ古語拾遺ハ高皇產靈神を

ト是皇親神留使命ハ見エ神皇產靈神ハト是皇親
神留弥命ト有ル同例あり且氣比大神宮舊記ハ氣比
大神ハ七社御子ト有ル中ハ天伊佐奈彦神社天伊佐
奈姫神社ト所見ルハ即此大神ハ御在ハ坐スル
可テ事をも思合テ可ク多ク有ル其ハ神名式ハ越
前國敦賀郡氣比
神社七座並名神大ト見エテ其御社ハ保食神ハ御
在ハ坐ス事傳十四卷五十八下ハ注セテハ然ル
ハ此二神ハ御社をハ合セテ七社御子ト申サハ枝社
の謂ハテ御親子ハ御事ハ御在ハ坐スルハ枝社
天皇美和七年御紀ハ九月癸酉朔乙酉奉授越前國從
二位勲一等氣比大神之御子无任天利劍神天地若
御子神天伊佐奈彦神並從五位下ト有ル御子即別社
を申スル其社記ハ天伊佐奈姫神ハ此ハ天比女若御
子神ハ不又姓氏錄ハ謂ハ伊佐布魂命ト申奉ルハ
帝ト可キ

御名に神名式に陸奥國會津郡伊佐須美神社名神
此二に二大神を合せて稱奉る御名に御在し坐る事
傳十五百二に註るが如し偕伊佐布魂命と申奉る御
名に伊佐の聲より布の生ふて粟生豆生藟生麻生ふ
て之を生ふて物の出來る事を云ふり魂の例の如く
産靈の義より又伊佐須美神と申すも聲産靈の
略あるふに此二大神の國土萬物を生給ひて世
中在りて神より人より御祖に渡りて給へば國
土より成出る萬物の上に高皇産靈尊神皇産靈
尊中此二柱御祖神下の謂ゆる五元神を始として

各其神有て此を成し給へば此二柱御祖神に産靈
の御名御在し坐る事實然有ぬ可き理ふも有け
る傳十二百二十三十七下云る五元神の所屬の御事
小就し考ふ可き者ありけり但其伊佐布魂命の姓氏
文連前擬魂命男伊佐布魂命之後也見之次竹原
同上の有少次額田部宿禰同神男五十狹經魂命之
後也有之事ふれども此は大神手力柱神天日鷲
神の神系を正して云説ふに少縁の事非ハ傳十
一卷十下二十二卷百十下云るを考合
す可し因ふに姓氏録に神別を天神天孫地祇と三
部に立くはれども其天神と云る多し此二柱御祖神
の御子孫なるを一所に其御名を出さざりて遠く
遠く天神中主尊高皇産靈尊神皇産靈尊三柱を始
奉り次ふに前擬魂命天底立命等係りたるに柱御
祖神より系を立る事を憚奉る子細有る事と所見に
少次天孫と申すに天照太神の御子より始りて神代

の宸流を云ふり次小地祇と云ふ素戔嗚尊以下の裔
を云ひ神武天皇以後の宸流を皇別と云ふ其近きを
尊と爲す事小皇別を先と一天神を中と一天神を
後と爲す法あり若て其系を二柱御祖神又天照太神
と爲す事あり引ずりて何れも其始と爲す神を以て祖
と爲す事あり其伊佐布魂命と申すも常小祚奉祀
と爲す事あり別神と心得り故此二柱御祖神
此御名を擧げり者も有り故此二柱御祖神
一も彼古国稚地稚之時と云時より天神の御命と本
より己小隐身あり御在り坐りて其邊土煮尊沙土
煮尊と申奉りし時より今茲小皇より伊弉諾尊伊
弉冉尊と申奉りて顯身の神と成定さる世御在り坐
るあがく小其地上の事小係列り世御在り坐り
て國常立尊豊斟淳尊二神一も常在て御體を顯

し給はざるを以て凡ての御功用世小顯はれさせ給
はざり雖も實小は顯幽の差有て各相預る世給ふ御
事申すも更あり上小己小委りく云ふか如く國常立
尊一も大地の公運を所知食す大神小渡り世給ひ
て南南の初小己小一年二年の來經有り豊國主尊
一も大地の私運を主とせ御在り坐り一日一夜
の往代る事亦其時より出來初なりけむ事申すも更
あり又其國底立尊と申奉る方より御功用小依り久方
の空行り月小大地小屬り五星小大地と共小天日小
從りて巡り初なりければ形も如く天先成て地後小

定まらりし者ありけり師の天朝無窮曆第二章大地の日
 小從ひて漂在ひ旋る小定まらりし道有り其ハ一年小
 日を一周年しつゝ一度ハ昇り一度ハ降る是ハ大地の
 大運あるハ其昇り降りする間小又三百六十余の小
 運有て日小向ふ域ハ晝を成し日小背けり域ハ夜を
 成す此ハ伊邪那岐伊邪那美二柱大神其天皇祖三神の
 御言依し不因て彼天之御柱國之御柱と衝突して固め
 給ひ一靈威小因て事ありし之れなる實然言小
 て此大地の公運私運ハ別小右小云々如子神の
 御在し坐て然物爲させ給ふ事小有れども各獨

神成坐て隐身小御在し坐ける此二柱御祖神の
 御事迹との思ゆるか如くあるハ彼顯幽の差有ハ
 故ありけり但月の巡初なりし事其第八章小大國
 漸離り空ニ見ハ大地の旋小從ひつゝ運る事始
 まり是より大地の此を望めり日と月と互に
 書て夜とを特別に旋る如く見ゆ事ハ成ふなり
 こと云れり予ハ心あり日と月と天地の初より出来初
 て有りけるを日神月神ハ後小其國ハ入るにせ給ふ
 事見らる故小此月と黄泉との説ハ大ニ相乖
 けり事本より事あり然れども師ハ然る天壤と無
 窮年月の來往を測量て神代の日至今推て知て
 く悉く其物爲るハ其齊策の如き予飽す下
 信て其説小從ふ事あり然れども初めり旋り出
 たり甲子歳甲戌を上上とて二柱御祖神の御代の
 中置るハ其説小違ハざる可くや晉の事ハ此
 是く止事無く太卜事あり予ハ説ハ若思ふハ此
 を棄てく若當りたるむと思はる師説小合せて其月

の旋初たる年紀を推究め其より起して合朔の曆を
立て師の無窮曆の無窮なる事を天下小事謀る人
有るは吾靈合人にて然公運私運の有る此大地の
上より溼土煮尊沙土煮尊の二物と共
ふ成出させ御在り坐ゆる大神の坐を其始の向の浮
膏より漸く溼り如く成初なり此時にて天神
諸の御命を戴持して其賜のせたる天瓊戈を以て其
溼土を煮凝して沙土と成し給ふ此の於て礮駟盧鳴
多む成出たりければ其天瓊戈を衝立て天柱と化堅
給ひ国中の天柱と爲り国鎮と太敷立てせ給ひて
有ける此の於て国土初て見ゆる運あり此の経て

角撒尊活撒尊と称奉りて其成出む国土の上の於て
草木此の芽む可く活物此の生出べく大土中を神
氣を孕み初てあむ有けり次は戸之道尊大戸之
邊尊と申奉りて八尋發化作させ給ひて初めて住せ
させ御在り坐ふ至りて其隱身御在り坐ゆると
猪頭身の人を状し見ゆるさせ給ひて依り此の考
姫の称有り若りて面足尊惶根尊と称奉りて如く
御面の足は御在り坐ゆる威儀此の於て具つさせ
給へるなり又国土の面は地上の足整ひ国柱は地下
疑固りて神も国も相共ふ全く具つたりては已ふ

〇故此より後ハ伊弉
諾尊伊弉册尊ニ申
奉リテ外ハ御名ヲ御
在ニ生ズルハ因ヨリ
者アリ又此後ハ其體上
無尊以テ尊尊ニ申奉
ルヨリ求次ニ御奉
ル御名傳ハ別神ノ
加ハ傳ハレタルニ代
十神ト別レタルニ
有リハ實ニ唯此伊弉
諾尊伊弉册尊ニ神
ノミテ御在ニ生ル

共爲夫婦爲^{ミトノミガヒ}世給^{ミコトノミカヒ}可^{ミコトノミカヒ}御時^{ミコトノミカヒ}至^{ミコトノミカヒ}相共^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}辭^{ミコトノミカヒ}
以給^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}國^{ミコトノミカヒ}を生^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}神^{ミコトノミカヒ}を生^{ミコトノミカヒ}給^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}今^{ミコトノミカヒ}見^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}如^{ミコトノミカヒ}此^{ミコトノミカヒ}國^{ミコトノミカヒ}土^{ミコトノミカヒ}
萬^{ミコトノミカヒ}物^{ミコトノミカヒ}を成^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}給^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}故^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}然^{ミコトノミカヒ}申^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}此^{ミコトノミカヒ}二^{ミコトノミカヒ}柱^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}祖^{ミコトノミカヒ}神^{ミコトノミカヒ}
無^{ミコトノミカヒ}上^{ミコトノミカヒ}于^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}功^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}て負^{ミコトノミカヒ}給^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}多^{ミコトノミカヒ}む有^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}備^{ミコトノミカヒ}此^{ミコトノミカヒ}
五^{ミコトノミカヒ}代^{ミコトノミカヒ}十^{ミコトノミカヒ}神^{ミコトノミカヒ}の御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}の御^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}を記^{ミコトノミカヒ}傳^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}次^{ミコトノミカヒ}第^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}配^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}當^{ミコトノミカヒ}て負^{ミコトノミカヒ}
世^{ミコトノミカヒ}奉^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}者^{ミコトノミカヒ}多^{ミコトノミカヒ}しと云^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}所^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}味^{ミコトノミカヒ}氣^{ミコトノミカヒ}無^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}
以^{ミコトノミカヒ}之^{ミコトノミカヒ}凡^{ミコトノミカヒ}物^{ミコトノミカヒ}有^{ミコトノミカヒ}て名^{ミコトノミカヒ}無^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}無^{ミコトノミカヒ}く名^{ミコトノミカヒ}有^{ミコトノミカヒ}て物^{ミコトノミカヒ}非^{ミコトノミカヒ}ざる事^{ミコトノミカヒ}無^{ミコトノミカヒ}
事^{ミコトノミカヒ}古^{ミコトノミカヒ}より然^{ミコトノミカヒ}り誰^{ミコトノミカヒ}も然^{ミコトノミカヒ}る推^{ミコトノミカヒ}當^{ミコトノミカヒ}の事^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}て成^{ミコトノミカヒ}す可^{ミコトノミカヒ}す
又^{ミコトノミカヒ}説^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}國^{ミコトノミカヒ}土^{ミコトノミカヒ}も神^{ミコトノミカヒ}も其^{ミコトノミカヒ}神^{ミコトノミカヒ}の生^{ミコトノミカヒ}生^{ミコトノミカヒ}し時^{ミコトノミカヒ}の形^{ミコトノミカヒ}状^{ミコトノミカヒ}も各^{ミコトノミカヒ}其^{ミコトノミカヒ}神^{ミコトノミカヒ}
名^{ミコトノミカヒ}の如^{ミコトノミカヒ}くあるのみならず必^{ミコトノミカヒ}ず必^{ミコトノミカヒ}ず其^{ミコトノミカヒ}時^{ミコトノミカヒ}の形^{ミコトノミカヒ}状^{ミコトノミカヒ}も抱^{ミコトノミカヒ}

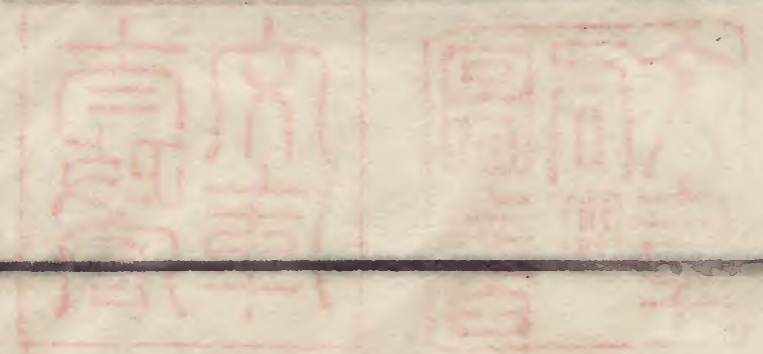
ハらず唯^{ミコトノミカヒ}大^{ミコトノミカヒ}元^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}て次^{ミコトノミカヒ}第^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}も配^{ミコトノミカヒ}當^{ミコトノミカヒ}たるのこも
以^{ミコトノミカヒ}然^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}此^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}に之^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}て各^{ミコトノミカヒ}其^{ミコトノミカヒ}時^{ミコトノミカヒ}の形^{ミコトノミカヒ}状^{ミコトノミカヒ}も當^{ミコトノミカヒ}て
ハ見^{ミコトノミカヒ}る可^{ミコトノミカヒ}くず此^{ミコトノミカヒ}を能^{ミコトノミカヒ}辨^{ミコトノミカヒ}へずハ疑^{ミコトノミカヒ}有^{ミコトノミカヒ}れと云^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}たる
ハ大人^{ミコトノミカヒ}の言^{ミコトノミカヒ}とも思^{ミコトノミカヒ}えざる租^{ミコトノミカヒ}説^{ミコトノミカヒ}と云^{ミコトノミカヒ}者^{ミコトノミカヒ}多^{ミコトノミカヒ}り彼^{ミコトノミカヒ}景^{ミコトノミカヒ}行^{ミコトノミカヒ}天^{ミコトノミカヒ}
皇^{ミコトノミカヒ}の大^{ミコトノミカヒ}倭^{ミコトノミカヒ}國^{ミコトノミカヒ}者^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}行^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}負^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}國^{ミコトノミカヒ}也^{ミコトノミカヒ}と宣^{ミコトノミカヒ}て云^{ミコトノミカヒ}大^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}言^{ミコトノミカヒ}を引^{ミコトノミカヒ}
て傳^{ミコトノミカヒ}四^{ミコトノミカヒ}五^{ミコトノミカヒ}十^{ミコトノミカヒ}六^{ミコトノミカヒ}下^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}多^{ミコトノミカヒ}るが如^{ミコトノミカヒ}く事^{ミコトノミカヒ}實^{ミコトノミカヒ}の説^{ミコトノミカヒ}ハ傳^{ミコトノミカヒ}ふ方^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}取^{ミコトノミカヒ}
て互^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}少^{ミコトノミカヒ}りの相^{ミコトノミカヒ}違^{ミコトノミカヒ}も無^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}能^{ミコトノミカヒ}ハざるを其^{ミコトノミカヒ}行^{ミコトノミカヒ}事^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}
て御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}負^{ミコトノミカヒ}せる事^{ミコトノミカヒ}ハハ誰^{ミコトノミカヒ}か目^{ミコトノミカヒ}も其^{ミコトノミカヒ}と著^{ミコトノミカヒ}明^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}
所^{ミコトノミカヒ}爲^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}て御^{ミコトノミカヒ}身^{ミコトノミカヒ}自^{ミコトノミカヒ}然^{ミコトノミカヒ}御^{ミコトノミカヒ}名^{ミコトノミカヒ}亦^{ミコトノミカヒ}爲^{ミコトノミカヒ}せ給^{ミコトノミカヒ}以^{ミコトノミカヒ}使^{ミコトノミカヒ}り其^{ミコトノミカヒ}
趣^{ミコトノミカヒ}を以^{ミコトノミカヒ}て稱^{ミコトノミカヒ}奉^{ミコトノミカヒ}る事^{ミコトノミカヒ}多^{ミコトノミカヒ}るが故^{ミコトノミカヒ}不^{ミコトノミカヒ}赤^{ミコトノミカヒ}きハ何^{ミコトノミカヒ}れよりハ赤

黒くハ誰か見ても黒くハ云ふ外無き此即正
實の名と云ふ物あり有ければ此神名を以て其御事
をハ明く奉る可きを其をハ其時の形状と當て
見ると可くずハ何を擬としてハ伺知奉るハ然れ
ハ此ハ初めて此皇大神學を起さばなりける時の事
此ハ各其御名共の義ハハ二柱御祖神の御事の事
合て其以前の事ハ中々合さずハ其疑有が
爲ハ然云ねたりして其然疑ハハ見えたりけるこ
ろ却りて上件の御名共ハハ此大神の幼くするの次
ニ小負坐る故ありけりとの見ゆる事ありければ皆古事

記序ハ然乾坤初分參神作造化之首陰陽斯開二靈爲
群品之祖と有て上の三神ハ此二柱とのを擧て餘
事を云ざるハ故有る事あり其ハ彼天神中主尊高皇
產靈尊神皇產靈尊の三神より直ハ此伊弉諾伊弉册
二神ハ兼る所以有る事あり彼可美葦牙彥舅尊天常
立尊ハ天神ハ坐して天を造立給ふ神ハ坐せども
正身ハ隱身ハ神ハ坐して國常立尊豐斟滄尊ハ國と
俱生坐る神ハ坐せども公運私運の事を所知有て
其神功用国土の全体ハ亘る事あり本より隱身ハ
神所爲ハ渡りて給へば何方より國土ハ始ハ唯

此二柱御祖神の事不御在坐故古事記不於是
天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理國
成是多陀用幣荒之國賜天沼矛而言依賜也見之此
八洲起元章第一一書小天神謂伊弉諾尊伊弉册尊
云々有彼參神より直小御事依一の御事ころの
御在坐此故西蕃の古説小師立事太古傳小徴水たろか
如く右の參神、上皇大一元始天王大元聖母の申一
儒家小謂也大一氏盤古氏是より二靈ハ天皇氏
地皇氏是より人皇氏、其御子小當りて素戔嗚尊是
より由三五本國考小説註小水に如其引三五曆

記小盤古氏夫妻陰陽之始陶鑄造化之主天地萬物之
祖也盤古氏之後乃有三皇此天地人之始也有彼
小可美葦牙參尊天常立尊小當り國常立尊豐斟
淨尊小當り神無く盤古氏より直小三皇小且こ
ハ此小參神二靈と相續く小同ト然る小ても
我古傳小右等の隱身の神の御在坐て出不天
地を相造る世給る古説の如此傳の水に實不
貴く辱る御事の有り又辛田翁の計正さ水に
春秋命璧序小天地初立有天皇氏十二頭号曰天靈
云々地皇亦十二頭号曰地靈云々人皇九頭云々出谷
口一日喝谷分九河依山川去地之勢裁度為九州謂之
九國各居其一因是而區別有彼小天靈地靈と云
小素戔嗚尊の御事ハ人皇氏と云々然傳の水に
といて天照大神の傳無き此を昊天上帝と申し伊
三皇の外に置る者の又御鎮座傳記ハ一記曰伊
弉諾 伊弉册尊の有り下に古語曰伊舍那伊舍那
天紀ハ兩部習合者の所為る事本の御事ハ
が類聚神祇本源の此各を以て二柱御祖神ハ
當る所に此彼有り五六百年以前の説の





雖云當くばるふ、非可く、又印度の古説十二天
 錢軌、小伊邪那、天萬云、摩醯首羅、唐天、大自在天、此天歡
 時諸天亦歡喜、威光倍増、安穩而住、此天曠時、魔衆皆現
 國土荒乱、小伊邪那、天與諸魔衆俱來、入此檀、同時受
 供、小伊邪那、大毘盧舍那、經住心、出、小黒天、疏、小梵言、嚕
 捺羅、之有、を因、明論、小嚕捺羅、是摩醯首羅、之化身也、亦
 名、伊邪那、是欲界、頂、伊舍那、也、有、小面、白く、今、抄
 出、た、る、あり、又、新、井、君、美、々、西、洋、雜、記、小、大、戎、才、り、聞、は
 小印度、度、佛、法、説、小昔、伊、曾、良、々、有、り、天、才、り、一、高
 山、頂、頂、小降、之、伊、曾、羅、而、國、人、小教、を、施、こ、し、人、才、り、安
 樂、得、道、せ、し、め、而、後、小天、小昇、去、る、云、く、書、せ、り、
 正、く、右、小伊、舍、那、天、也、我、二、在、却、祖、神、の、破、取、靈、島
 小天、降、生、し、事、之、伊、辨、諾、尊、の、登、天、報、命、の、事、を、傳、入
 たり、小訛、説、る、り、又、其、地、南、國、説、小大、古、の、世、に、造、物
 主、已、小天、地、を、造、有、り、後、小人、才、始、祖、男、女、二、人、を、造
 り、し、此、を、樂、界、の、地、小置、く、其、男、才、阿、陀、年、云、ひ、女、を
 延、壽、と、云、ふ、一、云、造、物、主、天、地、を、造、成、り、後、小塊、を、搏
 成、し、て、此、二、人、の、形、を、造、り、万、民、の、始、祖、と、成、す、と、
 云、ふ、小此、訛、傳、ふ、り、猶、斯、る、類、を、説、共、各、万、國、小傳、入
 たり、と、云、ふ、多、く、あり、可、く、然、る、有、り、と、我、が、神、典、の

明治七年七月七日
 菅政友

